

# 研究所報

No.31

1994. 3. 31.

目次	「国際仏教研究」の課題	1
	1994年度「一般研究」選考結果発表	2
	1994年度「一般研究」研究目的紹介	3
	学会参加報告	6
	開放セミナー	24
	彙報	27

## 「国際仏教研究」の課題

国際仏教研究班チーフ・教授 多田 稔

「国際仏教研究」プロジェクト・チームが活動を始めてからこの三年間にヨーロッパ、アメリカ、アジア各国からの数十人にも及ぶ仏教学者・研究者が当研究所を訪問された。そしてその都度、貴重な講演をして下さったり、研究員との意見交換の場に来ていただいて忌憚のない御意見を聞かせていただいたことであった。他方では、今度は当研究員たちが、世界の主だった仏教関係の学会に参加して、ペーパーを読んだりパネルを組んだりして、研究発表に努めてもきた。

こうしたことのハイライトともいべき学会が、1993年の夏には二つ開かれた。一つは第6回国際真宗学会で、本学会を会場として日本の内外からの数百人の参加者を見て、三日間の会期を盛会裡に了えた。他の一つは、万国宗教会議(1893年)の百年記念大会であった。これはもう、全世界から七千人以上もの宗教者が集まり、百年前の前回同様、シカゴで十日間にわたって開かれた、想像を絶するほど大きな宗教学会であった。

こうした世界の思想の流れの中において、仏教に対する理解がますます深まりつつあるように思われる。また、国際的な仏教研究もすすみ、コンピューターを駆使した情報網を使って、その研究領域もその成果も、飛躍的に拡大結実されつつある。まことに御同慶の至りである。

しかしながら、こうした時流に乗って順調に見える流れの中において、時として幾つかの思いが鮮烈なイメージとなって、私の脳裏をかすめていくのである。思いつくまま、それらの中の幾らかを、将来の検討課題としてここにあげてみたい。

百年前の万国宗教会議は、仏教を含め東洋の宗教がはじめて国際舞台で認知されたのだということの意味。東西交流の事象はるか昔のアレキサンダー大王以前に始まったものであり、シルクロードを通じての文物の交流などによる長い歴史はあるのだが、西洋人の目から見れば、東洋学の始まりはウィリアム・ジョーンズ

卿(1746-94)が嚆矢であったという事実、つまり19世紀初頭から東洋学、なかでも仏教学は始まったものであり、その研究歴は二百年にすぎぬということ。そして、その研究がちょうど「言語」が「文化」となって具体化していくように、さほど違和感を感じさせないでその土壌に受け容れられるようになったのは、禅がアメリカで知られるようになった今から三十年前からなのである。

1893年の時点での万国宗教会議と1993年のそれとのそれぞれの意義。1921年に大谷大学で鈴木大拙が英語による禅の雑誌『イースタン・ブuddhist』を刊行したことの意義。そして勇ましい禅者の獅子吼にとってかわり、1983年第1回国際真宗学会がもたれたことにより、日本仏教における最大多数の信者をかかえる浄土真宗が、国際舞台で認知されて、西欧人の目に仏教の全貌がようやく認められたという現実。1960年代に行われた第二ヴァチカン公会議によって下された革命的とも言える対話の方向が、こうした流れにはずみをかけていること。日本仏教にあっても、明治維新について現在は第二の開国期にあるのは明らかなことであり、様々な問題があること。印度、中国、朝鮮などアジア諸国の中を通して築かれてきた日本仏教の成立ならびにそのIdentityが強く求められていること。日本仏教研究の国際化は、同時に日本仏教の活性化を招き、宗教活動の範囲が拡大するので、そのことは「自己」の力量が問われることとなるということ。宗教研究というのは単なる学問的研究でありうる筈はなく、研究、即主体的求道、自己のIdentityの確立につながるものでなければならぬ。自己の体験的事実の客体化されたものものでなければならぬ。

それにつけても昨年大谷大学で行われた第6回国際真宗学会の、あるパネルの最後に、フロアーの外国人の真宗門徒の一人から提起された問題、「仏教者同志の対話の必要」も痛感させられる昨今である。

## 1994(平成6)年度「一般研究」選考結果発表

1994(平成6)年度の「一般研究」が、真宗総合研究所委員会において慎重な審議のもと、下記の通り選考決定した。本年度の「一般研究」は、(A)共同研究四件、(B)個人研究二件である。

共同研究のうち、安富信哉教授を代表者とする「近代における仏教の展開—清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の集成—」は昨年度からの継続研究である。また共同研究の大河内了義教授を代表者とする「日本思想の歴史的総合的研究」、河内昭円教授を代表者とする「唐代釈教文の研究」、佐賀枝夏文助教授を代表者とする「仏教保育研究—その現状・理念・教育体系について—」、及び個人研究の大桑斉教授「近世初期思想史料研究」、米本義孝教授「『ユリシーズ』研究」は、新規の研究である。

### (A)共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
安富 信哉	研究課題 「近代における仏教の展開 —清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の集成—」 研究員 安富 信哉 教授/真宗学 加来 雄之 専任講師/真宗学 一楽 真 専任講師/真宗学	200万円
大河内了義	研究課題 「日本思想の歴史的総合的研究」 研究員 大河内了義 教授/ドイツ文学 池上 哲司 教授/倫理学 友田 孝興 教授/ドイツ文学 延塚 知道 助教授/真宗学 門脇 健 専任講師/宗教哲学	200万円
河内 昭円	研究課題 「唐代釈教文の研究」 研究員 河内 昭円 教授/中国文学 若槻 俊秀 教授/中国哲学史 大内 文雄 助教授/中国史 李 青 専任講師/中国語 佐藤 義寛 専任講師/中国文学 研究補助員 島津 京淳 大学院博士課程	200万円
佐賀枝夏文	研究課題 「仏教保育研究—その現状・理念・教育体系について—」 研究員 佐賀枝夏文 助教授/社会福祉学 岩田 宗一 教授/音楽学 嘱託研究員 大城 邦義 助手/短期幼児教育科	200万円

### (B)個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
大桑 斉	研究課題 「近世初期思想史料研究」 研究員 大桑 斉 教授/日本近世思想史 嘱託研究員 平田 厚志 龍谷大学助教授 前田 勉 愛知教育大学助教授 前田 一郎 本学非常勤講師 心山 義文 龍谷大学非常勤講師 研究補助員 福島 栄寿 大学院博士課程 武田 朋宏 大学院修士課程修了	100万円
米本 義孝	研究課題 「『ユリシーズ』研究」 研究員 米本 義孝 教授/英米文学 嘱託研究員 小田 基 東北大学教授 秋国 忠教 立命館大学元教授 David Burgess 本学非常勤講師	100万円

## 1994(平成6)年度「一般研究」研究目的紹介

## 共同研究

近代における仏教の展開  
—清沢満之の思想形成の研究と  
基礎資料の集成—研究代表者 教授 安富 信哉  
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之が、世界的な視野から仏教をとらえ、世界に仏教を顕揚しようとしていたことは周知のところである。このような課題を担った清沢の思想的課題は、その思想が形成される背景をうかがうことによって、はじめて明らかにすることができるであろう。その背景には東洋の仏教や儒教の伝統、近代において新しく紹介された西洋哲学など、多岐にわたっている。

今日、ある意味で、かつてないほどさまざまな視点から、近代において清沢がはたした役割についての議論がなされている。しかし、それらの論議は、必ずしも清沢の思想の背景について厳密な資料検討、もしくは十分な思想的読みを通してなされているとはいえない。

また今日、従来清沢研究の基本的資料であった『清沢満之全集』が絶版になっており、清沢を研究しようとする研究者がおかれている状況は決して満足できるものではない。この状況を考えると、多方面からの研究に耐えることができる基礎資料を学界に提供することは、清沢満之を学祖とする大谷大学の果たすべき責任であると信ずる。また本学の学生が「建学の精神」を学ぶための基礎テキストも入手できないような状況は軽視できない。早急に学祖である清沢を学ぶための基礎的な、しかも適切なテキストを作成することが急務である。

したがって本研究では、(1)清沢の思想形成およびその背景を検証し、(2)清沢研究に資する基礎資料の収集ならびに作成を目的とする。

## 共同研究

日本思想の歴史的  
総合的研究研究代表者 教授 大河内 了義  
(ドイツ文学)

Ueberweg の『哲学史』5巻 (*Grundriss der Geschichte der Philosophie*, 5 Bde.) と言え、ドイツ語圏で、またその影響のもとに哲学を志す者にとり、ほとんど一世紀にわたって必携の書物であった(勿論本学図書館にも収められている)。現在この著作の著作権所有者であるスイス・バーゼルの Schwabe 出版社は近年これの全面的改訂・増補を計画・実施中で、すでに十数巻刊行されている。

最近になって Schwabe 社の責任者 Dr. Oberstolz 及び直接の編集担当者 Dr. Rother の両氏から、新版刊行に際して「ヨーロッパ」哲学史の枠を超えて、これに東洋の哲学史として、それぞれインド・中国・日本の哲学を一巻づつ取めたいという願いが表明され、その日本の部分に関する協力の要請があった。この仕事の実現すれば、ドイツ語文化圏で哲学や思想の研究を志す人々に対して日本思想への確実で全面的な橋渡しをすることになり、その国際的意義ははかり知れないほど大きい。これはまた、ドイツ語文化圏から多くのことを学んだ日本からの「恩返し」の一部ともなわれる。

ただこの仕事には途方もない困難が伴うであろう。日本の思想と一口に言っても、古来の神道あり、儒教あり、なによりも仏教があり、加えて、そうした思想の根底の上に明治以来ヨーロッパの思想に触発・形成されてきた新しい哲学的営為がある。したがって、日本の思想全体を歴史的に跡づけ、学問的に整理し、二次文献表を作成し、その上でドイツ語に移すことは、よほどの天才でないかぎりほとんど不可能事であると言えよう。

しかしながら逆に、大谷大学こそこの仕事を共同研究を通じて成就させていくのに最もふさわしい場所であろうし、更にはこれこそ大谷大学の果たすべき責務である

と考えられる。そのために、まず志を同じうするものが集って、この研究を進めるためのコアを形成し、具体的作業に入る前に、思想の流れ、時代区分、代表的思想家、そのうちでも主として取り扱うべき著作などについて綿密な計画を立てることが不可欠である。したがって先ず、この予備作業にすべての力を結集し、いずれは学外からも国外からも協力者を得て、その実現を期したい。

## 共同研究

### 唐代釈教文の研究

研究代表者 教授 河内 昭円  
(中国文学)

ここに釈教文というのは、仏教関係の文という意味である。清朝に編纂された『全唐文』一千巻の中には膨大な量の仏教に関係する文、すなわち釈教文が収載されている。それらは、大約、詔勅・奏上文などの官制類、送序・寺記などの序記類、僧碑・寺碑などの碑銘類に分類されるが、いずれも唐代の文学史・仏教史・社会史上の諸問題を解明するための最も重要な基礎資料である。しかし残念ながらこれらの諸文を総合的に注解した書物はこれまでになく、研究者それぞれが当面する問題の処理にあたって、これらの諸文の読解に苦慮しているのが実状である。

本研究はその実状に鑑みて、これらの釈教文を精密に注解し、将来に刊行公開することを目的とするものである。

当該年度は、碑銘類に焦点を絞り、浄土教関係文献の注解から作業を開始することとする。

## 共同研究

### 仏教保育研究

—その現状・理念・教育体系について—

研究代表者 助教授 佐賀枝 夏文  
(社会福祉学)

本学の幼児教育科は、仏教の精神に基づく専門的保育者の養成を使命とし、未来の幼稚園教諭・保育者が仏教に根ざす自らの基盤を確かめ、仏教保育を志向することをその目標としている。本科開設以来関係者によって絶えず、使命完遂のための模索と研究が重ねられ、仏教保育をめぐる幾多の試みがなされてきたのである。

近年、保育をめぐる状況が著しく変化してきた。社会の価値観が多様化し、「婦人労働の変化」「少子化」などの事情が、家庭機能の変容と、保育現場への高い依存とをもたらしている。このことは、保育内容、形態ともに変革を余儀なくすると思えなければならない。いま、保育現場への要請は、狭義での「教育」、広義での「子育て」の両面において、従来よりさらにウエイトがかかりつつあるといえる。

このような今日の状況を踏まえて、より適切な「仏教保育」の再創造に向けて、基礎的な研究に着手したいと考えている。作業の手順として、一方で保育現場の現状把握、ならびに仏教保育の理念とあり方に関する先行研究、関連領域の資料収集をおこない、他方で大西憲明氏を中心としておこなわれた大谷派保育協会の「仏教保育」研究を視野において、仏教保育者の「あるべき姿」についての研究をすすめていきたい。

なお、研究の遂行に際して、保育実践から遊離することのないように、保育現場（大谷派保育協会）との十分な連絡を保ちながら作業をすすめていくことに留意したい。

## 個人研究

## 近世初期思想史料研究

研究代表者 教授 大桑 斉  
(日本近世思想史)

近年発見した近世初期思想史に関する二種の新史料について、これを翻刻し、注釈を加え、解説研究論文を付して、広く学界に紹介する事を目的とする。二種の新史料とは、A『井上主計頭覚書』、B『儒仏問答』で、共に内閣文庫に所蔵されている。

史料Aは、『東照宮御遺訓』として世に知られている仮名教訓書の、未発見の原本と推定される。現行流布本が神道と儒教の用語で修飾されているのに対して、仏教を中心とする三教一致思想が濃厚であり、この史料によって、近世初頭の仏教思想、特にその政治思想との関わりが解明されよう。

史料Bは、林羅山の仏教批判に対して松永貞徳が答えた18ヶ条に亘る往復書簡を公刊したもので、近世を通して展開する儒仏関係論(廃仏論と護法論)の先駆と位置付けられる。

この二種の史料は、すでに写真版で入手し、今回の研究メンバーや院生と共に一定程度の研究をすでに積み重ねている。とくに史料Aは大学院特別セミナー関連史料でもあり、第一次原稿がほぼでき上がっている。本研究において更なる検討整理を加えて原稿化を完成したい。史料Bも全体の三分の二ほどの第一次的検討が終わり、本年度では、残り部分の検討を行ったのち、全体を通じて再検討を加え原稿化を完了したい。以上のように、ここ数年に亘る研究の総仕上げをなし逃げる予定である。

## 個人研究

## 『ユリシーズ』研究

研究代表者 教授 米本 義孝  
(英米文学)

ジェイムズ・ジョイス(1882-1941)の『ユリシーズ』(1922)は今世紀最大の文学作品であり、またこれは非常に難解な長編小説としても有名である。かつて岩波文庫が完訳できず、途中で訳書の刊行を打ち切ったのは読者が全然つかなかったためであろう。英米文学の研究家でも、ジョイスを専門に研究している人は別として、『ユリシーズ』の重要性を感じながらも読んだ人が少ないのはその難解さゆえである。

そこで私の今回の研究とは『ユリシーズ』の読み方や意義を追究することである。

まず、語学面では、非論理的で破格構文にみちた文体を解読することと、登場人物たちの「意識の流れ」に一貫性をもたせて筋をつなぐこととに重点をおく。つぎに文学面では、内容を徹底的に把握することと、さらに、文学(ホーマ以来の西洋文学全般)、宗教(作品の全編でカトリック教の教義や儀式の意義が問われている)、哲学(トマス・アクィナスの宗教哲学など)、心理学(C. G. ユングは『ユリシーズ』から多大の影響を受けた)など作品中に縦横無尽に張りめぐらされた思想を原典にあたって解読することとに重点をおく。

このように、私は文学と言語の両方に細心の注意をはらって『ユリシーズ』の解読につとめ、それを詳細な注釈書としてシリーズで公にするつもりであり、その第一冊目が今秋研究社出版社から刊行の予定である。

The Sixth Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies  
3-5 August 1993, Otani University, Kyoto

## 国際真宗学会第6回大会参加報告

研究員・専任講師 加来雄之

大谷大学を会場として、1993年8月3日より5日まで3日間にわたって国際真宗学会第6回大会（The Sixth Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies）が開催された。

### はじめに

1991年に大谷大学真宗総合研究所の指定研究として始まった国際仏教研究班は、国際真宗学会（The International Association of Shin Buddhist Studies）に対し、単に仏教についての国際学会というだけでなく、真宗学についての唯一の国際的な学会として注目してきた。本研究所からは、安富信哉教授、多田稔教授、箕浦恵了教授、宮下晴輝助教授が過去の大会に参加している。とくに本研究班チーフ多田稔教授は、1991年8月にアメリカのカリフォルニア大学パークレー校で開催された第5回大会に、研究員である安富信哉助教授と加来雄之専任講師、さらには一楽真講師、樋口章信囑託研究員、また十数名の大谷大学の学生を伴って参加した。その大会で、多田教授は、応答者として発言し、閉会式では大谷大学の参加者を代表して挨拶を述べた\*。このような経過から、本研究班から、多田稔教授（研究班チーフ）、安富信哉教授（研究員）、宮下晴輝助教授（研究員）、ロバート・F・ローズ専任講師（研究員）、加来雄之専任講師（研究員）の5名が実行委員会のメンバーとして参画した。

\*大谷大学からは、安富教授が「金子大栄『真宗学序説』再考」というテーマで発表された。「研究所報」No.27に多田教授による参加報告が、また『親鸞教学』60号には、一楽講師によって「国際真宗学会第五回大会に参加して」と題して参加報告がなされている。

### 国際真宗学会

国際真宗学会は「真宗の国際的な真宗研究の発展と会員相互の国際的交流をはかる」ことを目的として1982年に創設された学会（発足当時の会員は海外8ヶ国30人を含む190人、初代会長は花山信勝教授（東京大学名誉教授））である。もともと真宗本願寺派（西本願寺）の海外開教が背景となって設立され、当初は、開教使の方々

が中心となって会を支え、開教における諸問題への関心が主であったと聞いている。近年は世界各国の真宗研究者が参加し、宗派を超えた学術的な場となってきている。第5回大会の案内では、学会の性格を次のように規定している。

国際真宗学会は、北米、ヨーロッパそして日本を中心とする400名\*ほどの会員を有する学会です。本学会は、親鸞によって開かれた浄土真宗をあらゆる視点から研究するために組織されています。

\*国内会員250名、海外会員150名

この学会の「最大の定期行事」は、1983年より2年に一度開かれている学会大会である。第1回大会は1983年、龍谷大学において千葉乗隆教授（当時龍谷大学学長）を大会委員長として行われ、1991年にはカリフォルニア大学パークレー校において「国際真宗学会の十年の節目に当たっての回顧と展望」のテーマのもとに第5回大会が開催されている。大会委員長はアルフレッド・ブルーム教授（IBS）であった。

この度の大会は6回目に当たり、第1回以来二度目の日本における大会であった。大谷大学の主催で開催されたのは、学会の強い要請によるものであった。

### 【大会テーマ】

はじめに大会テーマについて述べてみたい。

「大乘の至極 浄土真宗」

Jodo Shinshu: "The Ultimate Teaching of The Great Vehicle"— Contextual Exploration of Shin Buddhist Tradition

親鸞は「浄土真宗は大乘のなかの至極なり」（『末灯鈔』）と言っています。この言葉の中に、私たちは、大乘仏教の真理性を明らかにしようとした親鸞を見出すことができます。私たちの今日の課題は、その親鸞の姿勢にならって「浄土真宗」の教えの意味を現代社会において受けとめ直すことです。このような点から私たちは、大乘仏教としての「浄土真宗」を問い尋ねたいと願って、「大乘の至極 浄土真宗」という大会テーマを選びました。

(「第六回大会のお知らせ」より転載)

これは大谷大学の大会テーマの趣旨説明である。ここで言及されているように、このテーマは、親鸞の手紙(消息)である『末灯鈔』第一通にあげられる次の文章に基づく。

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真といふは、選択本願なり。仮といふは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかに至極なり。方便仮門のなかにまた大権実の教あり。

(東本願寺『真宗聖典』601頁)

親鸞はこの手紙において、関東にいる「いなかのひとびと」に「浄土真宗」とは畢竟何であるかを直截に伝えている。ここでは、親鸞は「浄土真宗」と名のることの意義を「選択本願」として明確に語る。

寺川俊昭教授(大谷大学学長)は、プログラム冒頭の「歓迎のこトバ」において、

親鸞は、13世紀の日本に生きた仏教徒である。彼は、長い探求の遍歴ののち、如来の本願を説く『大無量寿経』に遭遇することができた。そこに獲得した信念を、彼はその名のりがよく表しているように、すぐれた大乗の仏教者である世親・曇鸞の決定的な感化によって、大乗仏教の智慧そのものであると確信した。そしてこの“真実信心”に体験される真理を自ら生き、世の人々に伝える仕事に、その生涯を捧げたのである。

親鸞は、東北アジアの島国日本という、狭い限定された世界に生きた人である。しかしながら仏教者としての彼の思想形成は、それ自身一つの偉大な文化世界であるインド、そして中国に向かって大きく眼を開く中でなされていった。そして浄土教の伝統を形成した教説である『大無量寿経』から学び取った知見を「大涅槃を証することは、願力の回向による」と断言したのである。ここに大乗の仏教者親鸞の信念の核心があり、この信念に立って浄土真宗を「大乗の至極」といい放ったのである。

その親鸞の精神によって設立されているわが大谷大学を会場にして、国際真宗学会の第6回大会が開かれることを、大谷大学は大学をあげて歓迎する。この大会において、“世界”を視野におきながら、釈尊の仏教を“真宗”として開顕した親鸞の自覚的世界がよく解明されて、人生を真剣に生きようとする人々に豊かな知見を提供する機会となることを、私は心から期待するものである。

(第6回大会プログラムより転載)

と語る。この文にテーマの意図は十分尽くされている。

大会報告

#### 【第6回大会について】

大会開催の要請を受けた大谷大学は、寺川俊昭教授を大会委員長、小川一乗教授(大谷大学)を代表委員として国際真宗学会第6回大会開催実行委員会を結成し、大会の準備を進めた。大会の持ち方やスケジュールなどは、基本的に前のパークレー大会が踏襲された。ただ今回の大会では次のような新しい試みが行われた。

- (1) 大会テーマに準じたパネルのテーマを大谷大学で設定し、個人の研究発表であるセッションと区別した。(また従来は一会場で行われていたセッションは参加申し込みが多く、二会場で行うことになった。)
- (2) 使用言語を日本語と英語の二言語に限定した。また国際学会がもつ言葉の壁についての一つの解決方法として、英語・日本語のどちらでも発表できるようにした。発表者に対しては発表言語によるフルペーパーを提出してもらうこと、また可能なかぎり日本語・英語の二ヶ国語による発表要旨を提出してもらうことを求めた。また発表者や聴衆の便宜を考え、会場でなされる討議や質疑応答に通訳をつけた。

#### 【開会式】8月3日9時～9時50分(講堂)

開会式は代表委員の小川一乗教授の司会により大谷大学講堂で行われた。熊谷宗恵氏(真宗大谷派参務・大谷学園常務理事)による焼香・三帰依文拝読の後、小川教授が大会開催趣旨を説明した。また主催者を代表して細川信元氏(真宗大谷派宗務総長・大谷学園常務理事)が挨拶を行った。また第6回大会委員長として寺川俊昭教授が歓迎の意を表し、ついで今大会で同学会会長を辞任するマサトシ・ナガトミ教授(ハーバード大学)の挨拶がなされた。通訳はロバート・F・ローズ専任講師(大谷大学)が担当した。(挨拶などの要旨は報告末に掲載)

#### 【公開講演会】8月3日18時30分～21時00分(講堂)

大会を記念して大谷大学講堂において、大谷大学の寺川俊昭教授とミシガン大学教授のルイス・O・ゴメズ教授による公開講演(Public Lectures)がもたれた。この講演は日本語・英語の同時通訳がつけられた。寺川俊昭教授は、「信仰のダイナミクス—回向と願生—」(Life in the Vow: Dynamics of Faith in Jodo Shinshu)という講題のもと、信仰のもつ積極的な生を、願生浄土というキーワードを通して語られた。

ルイス・O・ゴメズ教授は“Texts, Visions, and

Embodiment: Imagining a Pure Land”（「浄土のイメージ—何が物語を意味深くするのか—」）と題し講演された。講演では、テキストは、言葉の世界とイメージされた世界を創造するものであると述べられ、信仰と信仰の物語的表現に伴うイメージについて語られた。

これらの浄土教のテキストもしくは親鸞の表現から何を読みとることができ、また何を読みとるべきであるか、という興味深い基調講演に、大会関係者のみならず、一般聴衆も加わり熱心に聞き入った。

寺川教授の講演はパトリシア・A・ホンダ氏（ロサンゼルス東本願寺）が、ゴメズ教授の講演は村瀬順子助教授（大谷大学）が同時通訳を担当した。（またこの講演の要旨は事前に聴衆に提供された。）

#### 【記念展観】8月3日～8月5日（多目的ホール）

大谷大学図書館は多目的ホールにおいて、大会期間中（1日は大谷大学で開催されていた安居の聴衆に限り公開された）特別記念展観として「親鸞から現代へ」（From Shinran to the Present）が開かれた。そこでの展観の趣旨は次のようである。

この特別展観では親鸞の著書『教行信証』の古写・刊本を主として、七祖聖教・列祖撰述の中から貴重書の類を選び出して展観しました。また先徳の遺徳を偲ぶよすがとするために墨蹟・寿像なども加え、併せて大谷大学との係わりから清沢満之、南条文雄、佐々木月樵、鈴木大拙、曾我量深、金子大栄の諸師の主要著作など若干を展観いたしました。

（目録における木村宣彰図書館長挨拶より転記）

展観には大会参加者のみならず、一般からも多く訪れた。また「図書館所蔵真宗関係貴重図書記念展観」目録（“Special Exhibit of Rare Books related to Shin Buddhism” Catalogue）が刊行された。

#### 【総会】8月4日17時30分～18時30分（1113教室）

総会に先立ち、大谷光真氏（浄土真宗本願寺派門主）が祝辞を述べた。総会は、学会事務局長、稲垣久雄教授（龍谷大学）の司会によって進められ、2日に開催された運営委員会の報告に基づき、マサトシ・ナガトミ会長（ハーバード大学）の後を受け、稲垣久雄教授が学会会長に就任し、またアルフレッド・ブルーム教授（IBS）が副会長に、学会事務局長後任として徳永道雄教授（京都女子大学）が選出された。

#### 【懇親会】8月4日6時30分（食堂）

総会の後、記念撮影が講堂横のサンクン・ガーデンで行われ、会場を学内食堂に移し、多田稔教授（大谷大

学）の司会のもとに懇親会がもたれた。

寺川俊昭教授・稲垣久雄教授よりスピーチがあり、国際真宗学会の前会長であった長尾雅人教授の乾杯の音頭によって懇親会が始められた。和やかな雰囲気の中で発表者、参加者の交流が行われ、それに学生も加わり盛会となった。

#### 【閉会式】8月5日17時（1113教室）

閉会式は、小川教授の司会の開式の辞によって始まった。まず第6回大会委員長である寺川俊昭教授より「大学としてこのような時を恵まれたことを心から感謝したい。またこの大会を契機として親鸞の思想が大乗仏教として広い分野で研究され、また海外の伝道活動にも意味あるものとして役立つことを期待する」という趣旨の挨拶があった。

ついで稲垣久雄教授より「いかなる意味においてもこの大会が大成功であった」として大谷大学の関係各位の努力に対する感謝の辞が述べられ、また総会の結果に基づいて、新しい役員が発表された。また稲垣教授は、会員を代表して長年会長を勤められたマサトシ・ナガトミ教授に謝辞を述べ、記念品を贈呈した。またそれに応じてマサトシ・ナガトミ教授からユーモアに満ちたスピーチがなされた。

小川教授の司会は井上尚実氏（U. C. サンタバーバラ校大学院）が、寺川教授の挨拶は安富信哉教授（大谷大学）が、ナガトミ教授のスピーチはマーク・ウンノ氏（スタンフォード大学大学院）が通訳した。

#### 研究発表

この大会では、4つのパネルと10のセッションがもたれた。

この報告では、その一いちを紹介することは省略する。それぞれの発表内容については、すでに大会中に発表要旨（英語と日本語の二カ国語によるレジュメ）、論文集（発表に使用した言語によるフルペーパー）が提供されている。パネルにおける討議、コメンテーターの応答やセッション会場における会場からの質疑応答は、上記の記録ではうかがうことはできないが、発表に劣らず興味深いものであった。多くの発表会場が、白熱した議論のために、予定された時間に終わることができず、大会事務局をやきもきさせる場面もあった。これらの有意義な議論についても、すべて記録されている。大会記録としてまとめられるのを待ちたい。

#### パネル

パネルでは「大乘の至極 浄土真宗」というテーマに



沿いながら、真宗学を国際化していく場合に基盤となるであろう四つのパネルテーマが実行委員会によって提起された。その提起に対してパネリストがそれぞれの課題から応答した。

パネルは4人のパネリストがそれぞれ15分の持ち時間で発表したのち、司会によってパネリスト相互による討論が進められ、また会場との質疑応答がなされた。またパネル3・4では、コメンテーターによってそれぞれの発表に対する問題点の指摘がなされた。パネルはそれぞれ120分が提供された。

それぞれの発表内容は、フルペーパーによって提出されているので、以下、それぞれのパネルのテーマ、司会者、コメンテーター、通訳者、そして発表者と発表題目(フルペーパーの言語、つまり発表言語によるもののみ)を紹介しておきたい。

#### パネル1

往生—現代における救いの問題

Ojo: The Problem of Salvation in the Contemporary World

司会 長崎法潤 (大谷大学)

通訳 羽田信生 (沼田仏教翻訳センター)

Mahayana Essence as Seen in the Concept of Return to This World

TOKUNAGA Michio, *Kyoto Women's University*  
On "Relying Upon" or "Taking Refuge" as a Genuine Human Activity

John Ross CARTER, *Colgate University*

往生の背景 佐藤正英 (東京大学)

往生—正定聚の機 神戸和麿 (大谷大学)

#### パネル2

対話上の諸問題—多元世界と浄土真宗

Dialogical Problems: Jodo Shinshu in a Pluralistic World

司会 多田 稔 (大谷大学)

通訳 トーマス・カシュナー (南山宗教文化研究所)

Fundamental Attitudes for Genuine Dialogue

Dennis GIRA, *Institut Catholique de Paris*

Against the Asceticisms of the Age: From Dialogue to Diapraxis

James W. HEISIG,

*Nanzan Institute for Religion and Culture*

Shinshu and Business

Gustavo A. PINTO,

*Candido Mendess University*

The Ultimacy of Jodo Shinshu: Shinran's Response to Tendai

Alfred BLOOM, *Institute of Buddhist Studies*

#### パネル3

言葉と解釈—聖典の翻訳をめぐる

Language and Hermeneutics: Concerning the Translation of Jodo Shinshu Texts

司会 レスリー・カワムラ (カルガリー大学)

コメンテーター ルイス・O・ゴメズ (ミシガン大学)

通訳 マーク・T・ウンノ (スタンフォード大学)

The Constantly-Walking Samadhi and the *Pratyutpanna-samadhi-sūtra*:

A Look at Chih-i's Use of Scripture

Paul SWANSON,

*Nanzan Institute for Religion and Culture*

Notes on Translation

Noman A. WADDELL, *Otani University*

Thus Have I Read: Philosophical Reflections on Translating Shinran

Thomas P. KASULIS, *Ohio State University*

Shinran's View of Language: A Buddhist Hermeneutics of Faith

Dennis HIROTA, *Honganji International Center*

#### パネル4

精神主義の意義—近代における浄土真宗の表現

The Significance of Kiyozawa Manshi's *Seishinshugi*: A Modern Expression of Jodo Shinshu

司会 安富信哉 (大谷大学)

コメンテーター 寺川俊昭 (大谷大学)

通訳 マーク・T・ウンノ (スタンフォード大学)

From a Savior to Seeker: Akegarasu Haya's Reinterpretation of "Amida"

HANEDA Nobuo,

*Numata Center for Buddhist Translation*

Subjectivity: The Strength and Weakness of the *Seishinshugi*

Gilbert L. JOHNSTON, *Eckerd College*

精神主義の近代性と現代性

加藤智見 (東京工芸大学)

The Wider Meaning of Kiyozawa Manshi's "Spiritual Awareness"

Michael E. PYE, *Lancaster University*

【セッション】

次に個人の研究発表を中心とするセッションについてであるが、15分の発表のあと、10分の質問時間をもつという形式でおこなった。セッションのテーマについては、大谷大学からセッション1「浄土真宗と現代的課題」、セッション2「大乘としての浄土教」という二つのテーマを提示した。セッション3「仏教とキリスト教における欲望と慈悲」は、ジェームス・L・フレデリック氏（ロヨラ・メアリーマウント大学）の提案によるものである（セッション3は希望によりパネル形式で行われた）。セッション4「真宗研究の現代的な方法」、セッション5「歎異抄研究の視座」、セッション6「真宗学の諸課題」は応募のあった発表題目に基づいて整理分類されたものである。

セッションの発表題目も概ね大会テーマにそったものであった。発表には二つの傾向があった。一つは、現代がかかえる危機的課題に真宗はどのように応えることができるのかという現実的な関心からなされるものである。今一つは、そのような問題に直接応えるのではなく、原理的な研究で応えようとするものである。また注目すべきことは『歎異抄』に関する発表が多かったことである。

セッション1-A

浄土真宗と現代的課題

Jodo Shinshu and Contemporary Issues

司会 ケネス・K・タナカ (IBS)

通訳 トーマス・カシュナー (南山宗教文化研究所)

Shinran and Modern Individualism

Gerhard SCHEPERS,

*International Christian University*

The Problem of Genres in Reading Shinran

Mark T. UNNO, *Stanford University*

Prolegomena to a Guenonian Hermeneutic of Jodo Shinshu

Ricard Mario GONÇALVES,

*São Paulo University*

セッション1-B

浄土真宗と現代的課題

Jodo Shinshu and Contemporary Issues

司会 安富信哉 (大谷大学)

通訳 伊東憲昭 (ウエストコピナ東本願寺)

Shin Buddhism and Process Thought

John S. YOKOTA, *Chikushi Jogakuen College*

The Problematics of Realization as a Basis for Dia-

logue in Shinshu and Zen

Gregory George GIBBS,

*Honganji International Center*

What Seems to be Essentially Important in Jodo Shinshu for the Contemporary Westerner: Where is the Pure Land in Shinran's Experience?

Myoshu Agnes JEDRZEJEWSKA,

*Honpa Honganji*

Human Calculation and Reason

NOMURA Nobuo, *Kyoto Women's University*

セッション1-C

浄土真宗と現代的課題

Jodo Shinshu and Contemporary Issues

司会 ルース・M・タブラ (本派本願寺ハワイ別院)

通訳 今井亮徳 (パークレー東本願寺)

Adapting Jodo-Shinshu Teaching for the West: An Approach Based on the American Work Ethic

Gordon FUNG & Gregory FUNG,

*California Institute of Integral Studies*

A Preliminary Comparative Study of Trans-Ethical Responsibility and Socratic Virtue-Ethics

David Wayne LEE,

*Institute of Buddhist Studies*

Markus LEONG,

*California Institute of Integral Studies*

真宗とデス・エデュケーション

田代俊孝 (同朋大学)

セッション2-A

大乘としての浄土教

Pure Land Teaching as Mahayana Buddhism

司会 徳永道雄 (京都女子大学)

通訳 今井亮徳 (パークレー東本願寺)

誓願一仏乗

小野蓮明 (大谷大学)

親鸞の仏性論と「大乘の至極」としての浄土真宗

三明智彰 (大谷大学)

The World of the Larger Sutra

ARAI Toshikazu, *Soai College*

セッション2-B

大乘としての浄土教

Pure Land Teaching as Mahayana Buddhism

司会 レスリー・カワムラ (カルガリー大学)

通訳 ロバート・F・ローズ (大谷大学)

Beginning at the End: No Practice in Shin and

Dzogchen

Roger J. CORLESS, *Duku University*

The Pure Land Faith in Tibetan Buddhism

ODANI Nobuchiyo, *Otani University*

浄土の考察—『維摩経』を中心として

織田顕祐 (大谷大学)

浄土真宗と『維摩経』の本義

橋本芳契 (金沢大学)

セッション3

仏教とキリスト教における欲望と慈悲

Desire and Compassion in Buddhism and Christianity

司会 ジェームス・L・フレディリック (ロヨラ・メアリーマウント大学)

通訳 マーク・T・ウンノ (スタンフォード大学)

The Liberation of Desire: Shinjin and Christian Quest for God.

James L. FREDERICKS,

*Loyola Marymount University*

Desire and Compassion in Mahayana Buddhism and Jodo Shinshu

Taitetsu UNNO, *Smith College*

Some Comparative Reflections on the Contrasting Uses of Desire in Buddhism, Christianity, and Jodo Shinshu

Jan van BRAGT,

*Nanzan Institute for Religion and Culture*

Shinran's View of 'desire' in the light of Amida's Vow

TAKEDA Ryusei, *Ryukoku University*

セッション4

真宗研究の現代的方法

Modern Approaches to the Study of Shin Buddhism

司会 野村信夫 (京都女子大学)

通訳 マーク・ブラム (フロリダアトランティック大学)

Some Problems in Shinran's Life: Facts and Interpretations

Jérôme DUCOR, *McGill University*

Shin Buddhism and Medieval Religion

James C. DOBBINS, *Oberlin College*Learning the Self is Forgetting the Self: The Zen of Kiyozawa's *Seishinshugi*

Patricia A. HONDA,

*Higashi Honganji Los Angeles*The Meaning of Freedom in *The Skeleton of A Philosophy of Religion*HIGUCHI Shoshin, *Otani University*

セッション5

歎異抄研究の視座

Perspectives on the *Tannisho*

司会 多田 稔 (大谷大学)

通訳 樋口章信 (大谷大学)

司会 デニス・ヒロタ (本願寺国際センター)

通訳 伊東憲昭 (ウエストコビナ東本願寺)

『歎異抄』における罪の問題

西田真因 (真宗大谷派教学研究)

親鸞における業の問題

安藤文雄 (大谷大学)

「親鸞一人がためなりけり」の頭わず意味—真実の仏道への顔き—

西崎京子 (岡山女子短期大学)

Kawarime

IMAI Akinori, *Berkeley Higashi Honganji*On the Nature of Dialectic of Shinran: especially in Reference to the *Tannisho*ICHIMURA Shohei, *Institute of Buddhist Studies*

セッション6-A

真宗学の諸課題

Problems in Shin Buddhist Teaching

司会 長崎法潤 (大谷大学)

通訳 ポール・スワンソン (南山宗教文化研究所)

*Jogyo-daihi*: Constantly Practicing Great Compassion: A Basis for Shin Involvement in the World

Kenneth K. TANAKA,

*Institute of Buddhist Studies*Nembutsu as *Śruti*MURAISHI Esho, *Honpa Honganji*

空・三昧・念仏

竹橋 太 (大谷大学)

時機相應の法

一楽 真 (大谷大学)

セッション6-B

真宗学の諸課題

Problems in Shin Buddhist Teaching

司会 小谷信千代 (大谷大学)

通訳 マーク・ウンノ (スタンフォード大学)

Religious Experience of the *Myokonin* in the Context of *Sangan-tennyu*

Angela ANDRADE,

*Institute of Buddhist Studies*

**A Study on the Concept of Ji-shin-kyo-nin-shin**

John IWOHARA, *Ryukoku University*

**Symbolic Meanings of Shinran's Dream at Rokkakudo**

INOUE Takami, *U.C. Santa Barbara*

またパネル・セッション、すべての学会の発表についてはレジュメ（発表要旨集）、フルペーパー（論文集）が提供されており、一応、基本的なことは知ることができる。また大会の記録として録画ビデオ、録音テープがある。

**【大会参加者など】**

3日間にわたる大会では、多くの研究者が国の内外から参加した。

参加者総数	約400名（大会参加申し込みと資料配布による概算）
正規登録会員	約120名
参加者国数	14ヶ国
発表者総数	53名
日本	27名
その他	26名
発表言語	
日本語	13名
英語	40名
発表者国籍	7ヶ国（日本、アメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ブラジル、ポーランド）

**【おわりに】**

大谷大学において国際真宗学会大会が開催された。社会にささげられ公開された大学として、これまで蓄積してきた真宗・仏教の研究をどのように表現することができたのか。また真宗学の国際化に、どのような貢献を果たすことができるか。我々はこの学会の開催を通して多くの啓発を受け、課題を与えられた。大谷大学の国際化のあり方を三つの視点から確認してみたい。

- ①大谷大学は親鸞の精神によって設立された大学である。
- ②大谷大学は清沢満之の「開校の辞」によって樹立された大学である。
- ③大谷大学は佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」によって確立された大学である。

本学設立の精神である親鸞の視野には三国が入っていた。世界史から見れば、親鸞は小さな粟散片州における一つの精神の華である。名もなき民衆の中にひっそりと咲いた華である。しかしその華は三国の歴史を担うものであった。親鸞の名からして、大乘を求める精神の象徴である。親鸞にとって三国とは何であったのか。そのうちの印度・中国は、文明という形で、当時の人類の苦難の歴史を象徴し代表する世界であり、大乘はその世界の苦悩を背負ってきた。そして日本は、「大乘相応の地」（磯長の夢告）として確認しなければならない場であった。つまり親鸞にとって、三国とは、人類の悩みをもっとも深く担う願い（選択本願）を証しする世界であり歴史であった。

本学を樹立した清沢満之の眼も広く世界に開かれていた。浄土真宗が思想として初めて世界に紹介されたのは清沢の“*The Skeleton of Philosophy of Religion*”である。清沢の、「人心の至奥より出ずる至盛の欲求のために宗教あるなり」という、主体的な学びと、また大谷派の存立意義を「世界人類の安心を求めんと期する所の源泉」と確かめた視座は、大谷大学の真宗学・仏教学の源泉となった。

本学の学を確立した佐々木月樵は「大谷大学樹立の精神」において「仏教の解放」について次のように語る。

若し仏教が唯僧侶の専有物でない已上は、恐らくは仏教学もまたその宗その宗の専有物であってはならぬと思ふ。即ち仏教が万人の宗教である已上は、その仏教学も、また必ず万人の学たることをそれ自身要求して居る。これやがて、本大学が仏教を学界に解放し、直接に間接に之を世間に普及するべく勉むる所以である。そのうち、唯一つ宗教として残された所の仏教は、我真宗である。されど真宗はもともと大乘仏教の極致であるが故に、そのまままた学として今後益々その研究を深め得るのである。これ即ち宗名を残しつつ然もまた学名を附するに至りし所以に外ならぬ。

これらのことばには、なぜ大乘の極致を「浄土の真宗」と呼ぶかということが的確に示されている。

印度の一人の青年によって発見された選択本願の種子が三国を伝来し、日本に浄土真宗と呼ばれる仏道の華を咲かせた。今また、その華の種子が世界に飛んでいく。その種子がそれらの土地に根付いたとき、選択本願の種子はどのような華を咲かせるのだろうか。われわれは、この世紀の中で、その華を見ることができのだろうか。

■【今日までになされている大会報告】

1. 小野達明「国際真宗学会・第六回大会の開催―大乗の至極 浄土真宗―」(『親鸞教学63号』)
2. 樋口章信「第六回「国際真宗学会」に参加して」(『親鸞教学63号』)
3. 国際真宗学会ニュース(第9号)

■この大会の開催にあたっては、真宗大谷派から物心両面にわたる多大な支援をえることができた。その姿勢は開会式における宗務総長の挨拶によくあらわれている。

■また本大会の運営の方法については、これまで学会を支えてこられた学会事務局の助言を受けることができた。

■大会の成立のために、大谷大学をあげた協力が得られた。当局、教職員・研修員、事務職員(総務課・教務課・企画課・図書館課)、現業職員の方々、また学生たちの協力がなければ大会を最後までやり遂げることはできなかったであろう。

また以下の人々が献身的に大会の運営を支えてくれた(敬称略・順不同)。

今井亮徳(パークレー東本願寺)  
伊東憲昭(ウエストコビナ東本願寺)  
羽田信生(沼田仏教翻訳センター)  
トーマス・カシュナー(南山宗教文化研究所)  
ポール・スワンソン(南山宗教文化研究所)  
マーク・ブラム(フロリダアトランティック大学)  
マーク・T・ウンノ(スタンフォード大学)  
井上尚実(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)  
カルロス加治屋(ブラジル開教区)

■開会式挨拶要旨

1. 真宗大谷派宗務総長・大谷大学学園理事長 細川信元 挨拶要旨

「今や国際社会は東西の冷戦構造の崩壊と共に歴史上、例を見ない混迷の中に投げ込まれている。政治、経済の面にも増して人類は、各人が煩惱具足の凡夫たることを深いところで自覚しなければならない。そしていかにして誤りのない安心に立ち得るかということが確かめられなければならない。宗祖親鸞聖人は深い悲しみの時代社会にあって、印度・中国・日本の三国という国際的な視野に立つ心の遍歴の中から、歴史を越えて誤りのない真実を開顕せられた。私共は現代において真宗の精神の国際化という言葉をおくるとき、親鸞聖人のご苦勞に対して謙虚でなくてはならない。このような時代認識を必要とするときに、親鸞聖人のお言葉『大乗の至極 浄土真宗』をメイン・テーマとして国際学会が開催されるということはまことに時宜を得た努力であると認

識する。私共は国際的な宗教学者、鈴木大拙先生を大切な先輩として仰いで参った。そして『教行信証』の英訳をはじめ、そのイースタン・ブuddhist・ソサイエティの活動を支えてきた。今後はこれを充実させるべく努めたいと思っている。また海外開教にもさらに力を尽くそうとしているところである。只今、ミシガン大学のルイス・ゴメズ教授による浄土三部経の翻訳・出版の準備を進めており、近々この事業の披露をする所存である。今大会に於いて十分の成果を挙げ、さらにこれを機として当学会が益々発展に向かうよう念願する」

2. 大谷大学学長・第6回大会委員長 寺川俊昭教授挨拶要旨

「私達は親鸞あるいは真宗に対して深い関心をもっております。その関心はさまざまでありまして、親鸞の信仰と思想、さらに親鸞から始まりました仏教の伝統である真宗が、人間にとって大切なもの、研究に値するものという認識と、そこから生まれた強い関心をもつ点は共通である。この大谷大学は親鸞の精神を教育の基本にもつ大学であり、この大会に集まってくださった皆様を大学は挙げて歓迎する。そして今日から始まるこの大会が充実した意味あるものになるよう強く期待する。(中略：前記したプログラムの挨拶とほぼ同文)『教行信証』で親鸞が真宗を語るもっとも意味深い言葉は「誓願一仏乗」です。如来の本願によって雑草のように生きる人間に実現するもっとも根元的な大乗仏教です。これが親鸞の信念です。浄土への往生ということは、どこか遠い所にある浄土へ生まれていくという単純なことではない。この現実世界の泥にまみれて生きていかなばならない人間である。そういう人間に念仏は大乗仏教の煩惱を具足しながら無上涅槃に至るという確信を開く。これが親鸞の信念である。この大会におきまして、単に日本だけでなく世界を視野におきながら釈尊の仏教を真宗、真実をいのちとする仏教として明らかにした親鸞の信念の世界をお互い、率直に、研究しているところを語り合い、そしてこの人生を真剣に生きようとしている人々に一つの大切な知見を提供する機会になることを心から期待する。」

3. 国際真宗学会会長・ハーバード大学教授 マサトシ・ナガトミ教授挨拶要旨

「皆様のご支援なくしては私は学会長の役割を一分も果たすことができなかつた。会長をやめるにあたり、皆様のご支援に感謝を表明したい。会長を辞任することは、思うままに発言できることであるから、自分の告白と学会の将来の展望について意見を述べたい。

前会長の長尾先生の後に会長になるように指名があり、最初はそういうことはできないという気持ちがあったが、次の瞬間、この学会は、「真宗学の意味は、仏教学なのか、神学なのか、あるいは宗派の狭い研究なのか」という私が長い間もっていた宗教的あるいは学問的な疑問について再び深く考える機会を与えてくれる、と思ひ、引き受けた次第である。それ以来、何回かこの問題について考える機会が与えられた。1989年に龍谷大学の350周年を記念する祭典に招かれ、真宗学とは何かという問題について国際的な視野から少し意見を述べた。国際的というのはどういうことか。それは聖典を翻訳することではない。それは国際的な視野に立って真宗あるいは親鸞の教えを考えることである。過去、何年かの間、さまざまな学会で親鸞あるいは真宗について比較文学的、あるいは対話上のペーパーやパネルが発表されるのを見てうれしく、この傾向は今後も続くと思われる。寺川学長がいうように、それは親鸞の思想をこの現代社会の中で再び新しく把握して考えていくことでなければならない。

今、アメリカでは学問の方法論が非常に煩雑になり混乱している。ポストモダン、解釈学、脱構築、そのような方法がたくさんとられているが、その意味は私の学生に聞いても明確な答えは返ってこない。しかし今、非常にエキサイティングな刺激の多い対話的狀況に私たちが置かれていることは確かである。そこには、私たちが共に使い、気を許している言葉の意味が明確になっていないという大きな問題をはらんでいる。

私は、この学会のリーダーシップがこのような世界的狀況の中で新しい平和と浄土真宗に対する創造的な発展をもたらすことを期待する。私の友人であるアメリカの神学者の言葉を借りよう。

「神学というものは古い伝統をそのまま受け継ぐのではなく、神学というものはあくまでも人間の創造力にもとづいた創造的な営みである」

まさしく真宗学に関してもそういうことがいえる。このような創造的な学問がこの真宗学会の新しいリーダー達によって推し進められていくことを期待する。」

1993 Parliament of the World's Religions  
28 August-5 September 1993, Chicago

# 宗教的多元主義の時代と仏教

## 「世界宗教会議」参加報告

研究員・教授 安富信哉

### (1) 新しい情況のなかで

昨年の8月28日から9月5日まで、アメリカの第2の都会であるシカゴで世界宗教会議 (Parliament of the World's Religions) が開かれた。私は、国際仏教研究班の活動の一環として、多田稔、樋口章信両先生とともに、この会議に出席する機会をえた。由緒あるパーマー・ハウス・ヒルトンを主会場とするこの会議には、世界各国から、さまざまな宗教的伝統に属する人々が参加した。それぞれの立場の人々が、朝には独自の宗教儀礼を執り行い、午前・午後を通して連日さまざまなテーマのもとで講演、セミナー、パネルあるいはシンポジウムをもち、それに付随して、音楽会や美術展などの催しも開かれた。大会プログラムによれば、デヴィッド・ラメジ (David Ramage, Jr.) 氏を委員長に、ダニエル・ゴメツ・イバネス (Daniel Gomez-Ibanez) 氏を実行委員代表に、イリノイ州知事、シカゴ市長を名誉副議長に迎え、ロックフェラー財団をはじめとする各種の団体をスポンサーとして大会を運営している。

ホテルのフロアーは、さまざまな宗教に属する人々があふれ、色とりどりのコスチュームを身にまとった人たちが行き交い、ちょっと異様な光景であった。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンズー教、シーク教、ジャイナ教、道教、神道、そのほか私の知らない宗教、たとえばゾロアスター教、アイシス教、バハイ教、アメリカ・インディアンの宗教などの信徒の姿もみられた。

私たちのように外国から訪れた者も少なくないだろうが、参加者の7割はアメリカ在住の宗教者ではないかと思った。何しろ地元である。アメリカには、白人だけでなく、中近東、アフリカ、アジア系のひとが沢山住んでいる。その人たちのなかに祖先の宗教的伝統は多く息づいている。よくアメリカは人種の坩堝であるというが、宗教の坩堝でもある。今回の会議の参加者は、7000人ほどと聞いた。

実は、この宗教会議はちょうど100年前の1893年9月におなじシカゴで開催された。これに先鞭をつけたのはこの地で開かれたコロンブス記念万国博覧会 (The World's Columbian Exposition) である。コロンブスのアメリカ大陸発見400年記念の大会の協賛行事であった。しかし物産展だけではものたりない、「より高尚で気高い」精神的な領域で交流する場をもちたいという声がおき、「万国宗教大会」の開催が発議され、J・H・バロース (John Henry Barrows) が委員長に任命され、ここに世界の諸宗教の代表者が一堂に会することになったのである。(注1)

仏教陣営では、セイロンのダルマパーラ (Anagarika Dharmapala) をはじめとして、日本から臨済宗の釈宗演、天台宗の芦津実全、真言宗の土宣法竜、真宗本願寺派の八淵蟠竜、それにこれらの人々の通訳を兼ねて野口善四郎の五人が出席し、さらに現地で平井金三が合流した。まさに仏教東漸を象徴する記念すべき会議であった。明治26年のことである。このおり徳永 (清沢) 満之の「宗教哲学骸骨」が、野口善四郎の翻訳によって紹介されたことは承知のとうりである。このころには科学の進歩、人類の未来に夢があった。仏教の各代表者は、自らが奉ずる教えを広布する絶好の機会と捉えて、この会議に臨んだのであった。八淵を送ったある人は、

是れ実に世界的仏教運動の一大好機会なり。千有余年太平洋中の蓬萊仙境に蟄居したる、我が日本仏教徒が奮起勇進して此大会を利用し、以て其特有なる高尚深遠の大乗仏教を、天下万人の想鏡に映ぜしむ可き、千載一遇の好機運なり

と述べたという。(注2)

そのときからすでに100年が経過した。人類はいたるところで多くの悲惨な戦争を経験し、また産業社会の発達に比例して各地で環境破壊が進んだ。科学の進歩によって人類の幸福な未来が到来すると素朴に信じること

のできる時代はおわった。また自分の属する宗教のみを高くし、他の宗教を低くする立場も崩れた。それぞれが、他の宗教的伝統を尊重して、ともに宗教性つまり宗教の本来性を追求していかなければどうにもならないという時代に立ち至った。はやりの言葉でいえば「宗教的多元主義」(Religious Pluralism)の時代の到来である。そんな危機意識を背景としながら、このたびアメリカ(シカゴ)、インド(バンガロール)、日本(伊勢)の各所で「世界宗教会議」が催されたのである。(注3)

私が参加したシカゴのこの会議で、たとえば、

“Earth Day XXV and the Globalization of an Earth Ethic” (8/31)

“Religion and the Struggle for Peace in South Africa” (9/1)

“Buddhism and Women’s Emancipation in Asia” (9/1)

というように、「宗教者と平和」「宗教者と人権」あるいは「宗教者とエコロジー」などの問題をテーマにした講義やシンポジウムが目立ったのはこのような宗教者の危機意識を反映している。8月29日付けのシカゴ・トリビューン日曜版は、「宗教会議、世界平和を求める」という記事を一面に載せた。

## (2) 現代仏教の一潮流

私の当初の期待は、他の宗教的伝統について学び、できれば「異宗教間対話」(interfaith dialogue)のプログラムに積極的に参加するということであった。しかし朝から夕方、そして時には夕食後まで、沢山のプログラムが目白押しに並び、それらが同時に進行する日程のなかでは、それはとてもかなわないことであった。このためテーマをしばって集会に出る必要がでてきた。

私の関心は仏教であるので、他の重要なプログラムについては、多田・樋口両先生におまかせして、私は、つとめて仏教の集まりに顔をだすことにした。仏教関係では、テラヴァーダ仏教、チベット仏教、そして禅のセッションが中心であった。これらが、いまの国際社会において仏教のヴォイスを代表している、と実感した。日本からの参加は、まったく少なかった。まして真宗からのヴォイスはほとんど聞こえなかった。B. C. A. (Buddhist Church of America, 西本願寺の北米開教組織)はどうしたのだろう、と思った。ただ、シカゴ仏教会の久保瀬暁明先生が大会初日のセレモニーで挨拶されたのがせめてもの救いであった。

強く印象づけられたのは、ヴェトナム、カンボジア、タイ、スリランカ、韓国(朝鮮)などの、いわば「第三世界」の仏教者たちのパワーである。かれらは、“エンゲージド・ブッデズム”(engaged Buddhism)つまり「社会に関与する仏教」を標榜し、連帯している。それは、あたかもフランスの戦後知識人たちの‘アンガージュマン’を連想させる行動的仏教の表明である。ティク・ナト・ハン(Thich Nhat Hanh)、カオ・ニョク・フォン(Cao Ngoc Phuong, Chan Khong)、マハ・ゴサナンダ(Preah Maha Ghosananda)、スラク・シワラクサ(Sulak Sivaraksa)、チャツマーン・カビルシン(Chatsumarn Kabilsingh)、A. T. アリヤラトネ(A. T. Ariyaratne)、チュン・オク・リイ(Chung Ok Lee)などの諸氏による発表、シンポジウムがあった。これらの講演者のなかで私が若干の面識があったのは、ACFOD(注4)代表のスラク・シワラクサ氏のみであった。タイの社会運動家である同氏は、1987年と89年に東本願寺を訪れ、宗務所などで講演したが、そのおりに少しばかりお手伝いしたことがある。それ以外の発表者の顔をみるのは、今回がはじめてであった。

“エンゲージド・ブッデズム”を提唱して、ヴェトナム戦争以来、一貫してこの運動を指導してきたのは、ヴェトナム僧ティク・ナト・ハン(釈一行)師であった。臨済僧の老師は、1967年、ヴェトナム仏教徒平和代表団の団長として訪米し、マルチン・ルーサー・キング牧師よりノーヴェル平和賞候補に指名された。平和運動家であり、詩人でもある同師には、たくさんの著書、講義、詩集がある。が、私たち日本の仏教徒に、その名は必ずしもよく知られていない。現在、フランスに在住しているが、健康的理由から、あまり公式の場に姿を出さないようである。その同師が、この世界宗教会議で、9月4日朝“Meditation and Mindfulness”と題する講義を行ったのは、この大会のハイライトのひとつであった。会場の大ホールには、この伝説的な人物をひとめ見ようと、多くの聴衆があつまった。

最初にフォーク・シンガーでもあるカオ・ニョク・フォン尼がきれいな澄んだ声で自作の詩をうたい、続いてスラク・シワラクサ氏が師のプロフィールを紹介した。ステージに姿を現わしたティク・ナト・ハン師は、小柄な人であった。やわらかな口調で、瞑想と憶念の意味深さについて説き、餓鬼道に堕ちてゆく現代の若者たちについて語った。話が一段落するごとに金鈴が入った。自身の帰依している仏教の三宝の精神について、また内省の大切さについて述べ、私たちひとりひとりが自らの依っている精神的伝統に帰るところにこそ、現代人の進むべき方向性があると説いた。話の内容にとりたて



て目新しいものはなかったが、西洋の伝統に育った者にも受け入れやすいような説得力があった。またその語りかけは静かで、予想とは違って、闘士のような激しい調子ではなかった。師がステージから降りると、ふたたびカオ・ニョク・フォンニが詩を歌い、さらにヴェトナムの人権問題の現状について話し、聴衆に理解を訴えた。

### (3) 相互理解の必要

世界宗教会議は、比較思想の学会ではなく、社会の現場で活動している宗教者たちを中心とする会議であった。このため平和問題や人権問題、あるいは環境問題に関する講義やシンポジウムが相次いだのは当然であった。私が参加したのは、仏教者の集まりにかざられたが、いくつかのセッションのトピックの流れのなかで、僧院から市井へ、山林から草の根へ、瞑想から現実へと行動するアジアの仏教者同士の活発な意見交換と相互の連帯に、私は強く印象づけられた。テラヴァーダ、マハーヤーナと、それぞれが所属する宗派は違っても、民族・地域・伝統を越えて、そのネットワークは、これからさらに広がってゆくことになろう。そのこと自体が宗教的多元主義の時代に沿った仏教徒のひとつのありかたである。会議の発表者たちは、平和や人権や環境の諸問題について、英語で積極的に発言し、仏教徒の側からアジア人の立場を訴えて精力的に活動する。かれらの英文の著述が多いことに改めて瞠目させられる。“エンゲージド・ブデズム”の名で表明されるかれらの活動は、いまや現代仏教のひとつの有力な流れとなっている。諸宗教との対話はもちろんこれまで同様に大切であるが、それとともに私たちはアジアの仏教徒の動向に注意を払

い、その主張に耳を傾け、お互いに仏陀の教えの意味を深めてゆく必要がある。私たちは、アジアの仏教徒の現在の活動について認識不足ではないか。今回、仏教者のシンポジウムや集會に参加する機会を得て、そんなことを思った。

さまざまなプログラムをもった1993年の世界宗教会議は、大会最終日、シカゴの野外音楽堂にグライラマ14世を迎え、その講演のあと、“The Declaration of a Global Ethic”と題する短い宣言文を採択して、ほぼ成功裡に全日程の幕を閉じた。

(注1) “The Dawn of Religious Pluralism-Voices from the World’s Parliament of Religions, 1893” (ed. by Richard Hughes Seager, OPEN COURT) p. 3.

(注2) 鈴木範久著「明治宗教思潮の研究」(東京大学出版会) 207頁

(注3) インドで開催された「世界宗教会議」については、「世界の宗教家、インドに集う」(「毎日新聞」8月19日朝刊、また同紙8月20日、21日、22日、23日、26日の朝刊)という記事が寄せられている。

(注4) Asian Cultural Forum on Development (開発に関するアジア文化フォーラム) ACFODは、現在アジアにおいてもっとも広範囲な民衆のネットワークをもつ組織。この場合の開発とは、第三世界における上からの開発の問題と、下からの開発、いわゆる民衆自身による人間開発という相反する二つの意味をもつ、という。

1993 Parliament of the World's Religions

28 August-5 September 1993, Chicago

## 「世界宗教会議 1993」に参加して

囑託研究員 樋口章信

1993年8月28日から9月5日まで世界各国から7,000名以上の参加者を集め、「世界宗教会議 (Parliament of the World's Religions)」が、米国シカゴのパーマーハウス・ヒルトンホテルで開催された。百年前の1893年、シカゴで万国博覧会が開かれた。The World's Columbian Exposition すなわち万国コロンブス (アメリカ発見400周年記念) 博覧会と銘打って開催されたのであった。その大会とほぼ同時並行でその精神版とでもいふべき「万国宗教会議」が催されたのである。それから百年が経過した。シカゴ市は総力を挙げて百周年記念大会実行委員会を組織した。その主旨は次の通りである。

1. 諸宗教共同体ならびに組織間の理解と協力を促進すること。
2. 調和の精神を鼓舞し、開かれた心と相互敬愛の心を以て諸宗教の豊かな多様性を祝福すること。
3. 個人の精神的発展と、地球的共同体に直面する危機的問題と課題とに関して宗教の役割を評価し、刷新すること。
4. 1993年世界宗教会議の準備をするにあたり、大会、研究発表、研究、宗教間の出会い、対話、交歓会、出版物展示、展覧会、宗教芸術祭、音楽会、舞踊、儀式、ならびに他の適当な活動を後援し、促進させること。
5. 宗教間グループの交流と諸プログラムを発展させ、奨励してこの世界宗教会議の精神を21世紀に展開させること。(Mission Statement による。)

参加者登録7700人という空前の数を知ったのはシカゴのローカル紙 *Sunday Sun-times* 9月5日付の記事によってであった。現地大会事務局でもこれほどの参加者があるとは予期していなかったという。相当多くの希望者が、会場参加のための収容能力余裕なしということで参加を断念せざるを得ないほどであった。

多田稔・安富信哉両教授とともに成田空港を予定の一日遅れで飛び立った。東京方面を襲った雨台風のためである。開会式には間に合わなかったが、一日目の8月28日以内には現地入りし、9月5日の閉会式まで8日間にわたりそれぞれ興味あるセッションやパネルを分担して

回った。どちらかというとも期間の長い学会であったので、後半になると少々集中力が不足してきた。だが私にとってシカゴを訪れるのは最初のこと。街の空気を胸一杯吸いながら Parliament of Religions 百周年記念大会のカラフルな雰囲気に触れたことであった。世界の主要な宗教の代表者による発表や多様な宗教比較的地位に立った発表を中心に、多彩なプログラムが組まれていた。そのほか地域社会と密着した地道な発表あり、人類を震撼させつつあるエイズに関するものあり、差別、戦争と平和についての発表あり、問題提起はさまざまであった。宗教間交流に目的を置く総論的なものであった印象が強い。まず学会の概要を述べたあとで、関心をもったプレゼンテーションを中心に報告させていただくことにする。

### 学会構成

(プログラム内容)

8月28日	
2:00-5:00pm.	開会式 (行進・祈り・アメリカ原住民長老による挨拶・祝祷)
8:00-10:00pm.	全体会議：[宗教交流と相互理解について]
8月29日	
9:00-12:00am.	祈り・瞑想 (諸宗教持ち回りで儀礼執行。朝の祈りは9月5日まで。)
2:00-5:30pm.	歓迎儀礼 (本会場以外にシカゴ地域の寺院、教会、モスク、聖堂、シナゴグ等でとりおこなわれる)
7:00-7:45pm.	全体会議：[我々は何をすればよいのか?]
8:00-10:00pm.	礼拝 (諸宗教が持ち回りで儀礼を執行。9月3日まで。)
8月30日	
9:00-12:00am.	全体考究会：[楽園のヴィジョンと可能性]
2:00-5:30pm.	全体考究会：[精神と伝統の声]
8:00-10:00pm.	全体考究会：[ヴィジョンから行動へ]

8月31日

9:00-9:45am 全体連絡会 (参加者に対してアナウンスメントやメッセージを与える時間になっている。9月3日まで連日)

10:00-12:00am セッションA  
2:00-3:30pm セッションB  
4:00-5:30pm セッションC  
8:00-10:00pm 全体会議: [精神生活]

9月1日

10:00-12:00am セッションA  
2:00-3:30pm セッションB  
4:00-5:30pm セッションC  
8:00-10:00 全体会議: [精神生活と社会生活]

9月2日

10:00-12:00am セッションA  
2:00-3:30pm セッションB  
4:00-5:30pm セッションC

9月3日

10:00-12:00am セッションA  
2:00-3:30pm セッションB  
4:00-5:30pm セッションC  
8:00-10:00pm 全体会議: [次世代へむけて]

9月4日

9:00-12:00am 地域共催組織によるプログラム  
12:00-4:00pm 昼食会ならびに21世紀に向けてのコンサート (グラント公園にて開催。Arlo Guthrie, Kenny Loggins などが出演。)  
6:00-8:30pm 閉会式 (グラント公園にて)  
\*ダライ・ラマ14世スピーチ  
\*宗教的指導者会議採択による「地球倫理宣言」  
\*折り  
\*閉会宣言

以上の大きな流れの中で大会が進められた。さてこの主催者側の実体は大きすぎてわかりづらかったのであるが、本部で確認したところ Daniel Gómez-Ibáñez というシカゴ在住の宗教者が実行委員長を勤められているとのことであった。大会名誉委員長としては Richard M. Daley シカゴ市長の名前を見る。プログラムにあと数人の実行委員の方々の名前が見える。本大会の会長として

名前を挙げられている方々はダライ・ラマ14世を初め、世界中に散らばり、25人にもものぼっている。いまその方々の名と宗教ならびに本部所在地をここに紹介してみよう (敬称省略)。

Brahma Kumari Dadi Prakashmani	
Brahma Kumaris	India
A. T. Ariyaratne	
Theravada Buddhist	Sri Lanka
Dalai Lama	
Tibetan Buddhist	India
Chung Ok Lee	
Wong Buddhist	U. S. A.
L. M. Shinghvi	
Jain	United Kingdom
Sivaya Subramuniyaswami	
Hindu	U. S. A.
Chidananda Saraswati	
Hindu	India
Mata Amritanandamayi	
Hindu	India
Imam Warith Deen Mohammed	
Muslim (Sunni)	U. S. A.
Syed Shahabuddin	
Muslim (Sunni)	India
Asad Husain	
Muslim	U. S. A.
Kamel al-Sharif	
Muslim (Sunni)	Jordan
Alfred Yazzie	
Native American (Navaho)	U. S. A.
Theodore M. Hesburgh	
Roman Catholic	U. S. A.
Herman Schaalman	
Jewish (Reform)	U. S. A.
Marcus Braybrooke	
Anglican	United Kingdom
Wilma Ellis	
Baha'i	U. S. A.
Jathedar Manjit Singh	
Sikh	India
Susannah Heschel	
Jewish (Conservative)	U. S. A.
Kaikhusroo Minocher Jamasp Asa	
Zoroastrian	India
Nana Apeadu	
Indigenous	Ghana

Wesley Ariarajah	
Protestant	Switzerland
Thelma Adair	
Protestant	U. S. A.
James A. Forbes Jr.	
Protestant	U. S. A.
Bishop Job	
Orthodox	U. S. A.

これを見てわかるように日本を代表する会長がおられない。参加者もテラヴァーダとチベット仏教が非常に目立っていた。日本への積極的参加の働きかけをおこなった大会とはいえないかもしれない。日本側の参加者は多くはなかったが、全体会議等で大いに仏教の立場を説かれていたのが阿部正雄先生であった。また開会式には The Buddhist Council of the Midwest を代表して、シカゴ仏教会の久保瀬暁明師が祝辞を述べられた。「シカゴ世界宗教学会議1993」開催にさいして、在米の8宗教団体が母胎となった。The Buddhist Council of the Midwest はそのひとつである。この組織は日本、韓国、台湾、ビルマ、カンボジア、ラオス、スリランカ、タイ、チベット、ベトナム、米国のそれぞれの伝統を汲む米國中東部地区の仏教団体によって構成されている。釈尊の誕生・成道・涅槃を記念する南方仏教系の行事 Visakha (vesakha)、すなわち二月祭を共同でおこなっておられる。

学会の内容をさらに詳しくお伝えするためにセッション A, B, C, (そのなかでセミナー、ワークショップ、メジャープレゼンテーションという分類がなされる) に含まれているテーマを紹介したいが、まず仏教関連発表だけに絞って紹介する。テーマと発表者だけで発表日は記さない(わかるものは代表組織も記す)。

#### 仏教関連の発表

“Buddhism and the Modern World”: Ananda Wickremeratne (Visiting Professor in Religion, Loyola University, U. S. A.)

“The Concept of *Anatta* in Buddhism”: C. Phangcham (American Buddhist Congress)

“Buddhism’s Contributions to World Peace”: Havanapola Ratnasara (College of Buddhist Studies, Los Angeles)

“The Relationship between *Sunyata* and Compassion: Samdhong Rimpoche (Institute of Higher Tibetan

Buddhist Studies, India)

“Religious Life”: M. Wipulasara Maha Thera (Mahabodhi Society of India); Ariyagnana (Respondent, Mahabodhi Society of India); Vajiragnana (Respondent, Mahabodhi Society of India)

“Buddhist Solutions for the 21st Century”: P. A. Payutto (Mahachula Buddhist University, Bangkok, Thailand)

“Buddhism and Peace”: David Kalupahana (University of Hawaii)

“Seeds of Peace”: Sulak Sivaraksa (International Network of Engaged Buddhists, Thailand)

“The World Peace Movement of the Japanese Religionists”: Ikeda Eiki (Shingonshu, Nakayamaji Temple)

“Cooperation and Unity among the World’s Religions”: Fujita Shunkyo (Shingonshu, Kannonji Temple)

“Vajrayana Buddhism in the 21st Century”: Khenchen Palden Sherab Rimpoche (Central Institute for Tibetan Higher Studies, Sarnath India; 15 years as Head Abbot, Nyimgma Department of Higher Studies, Varanasi, India); Kehnpo Tsewang Dongyal Rimpoche (Abbot in charge, the Nyimgma Institute and the Orgyen Cho-Khorling Monastery, Kathmandu, Nepal)

“The Development of Socially Engaged Buddhism (Panel)”: Jack Lawlor (Buddhist Council of the Midwest); Stephanie Kaza (University of Vermont); A. T. Ariyaratne (President of the Sarvodaya Movement in Sri Lanka); Sulak Sivaraksa (Founder of the International Network of Engaged Buddhists); Cao Ngoc Phuong (Vietnamese peace activist); Preah Maha Ghosananda (Supreme Patriarch of Cambodian Buddhism); Chatsumarn Kabilsingh (Thammasat University, Thailand)

“Spirituality and Healing”: Richard Katz (Saskatchewan Indian Federated College, Canada); Danny

Masqua (Anishinabe Elder from the Keesekoose Reservation in Saskatchewan, Canada); Pascaline Coff (founder and director of Osage Monastery); Geshe Sopa (University of Wisconsin, Madison)

“A Place for Women on Earth: A Buddhist Perspective”: Chatsumarn Kabilsingh (Thammasat University, Thailand)

“Two Types of Unity and Religious Pluralism”: Masao Abe (Professor Emeritus, Nara University); Donald Mitchell (Purdue University)

“Buddhist-Christian Monastic Dialogue: Sunyata and Kenosis — The Universal Arising of Compassion in the Spiritual Journey”: Dalai Lama; Julian von Duerbeck, OSB; Wayne Teasdale; Johanna Becker; C. Phangcham; David Steindl-Rast; Bhante Seelawimala; Patrick Henry; Thomas Keating, OCSO; Pascaline Coff, OSB; James Connor

“Meditation and Mindfulness”: Thich Nhat Hanh (Vietnamese Buddhist monk)

“Buddhism in the Modern World”: Preah Maha Ghosananda (Supreme Patriarch of Cambodian Buddhism)

セミナーならびにレクチャー形式のものとしては仏教関係では次のようなものがある。(但し、個人発表か、パネルか、あるいはシンポジウムかの違いであり、プログラムで一応発表形式の分類はしてあるが、セミナーであれ、レクチャーであれ、セッションの場合と大体同じと考えてよい。)

“Zen Spirituality and Practice”: Do An Sunim (Providence Zen Center); William Brown; Tony Somlai (Racine Zen Center, Wisconsin); Ronald R. Kidd (Bultasa Zen Group)

“Nagarjuna: the Buddhist Philosophy of Emptiness”: Yoga Guru

“Buddhism and Women’s Emancipation in Asia”: Hema Goonatilake (University of London)

“Dialogues on Our Buddhism”: C. Phangcham; Phi-

lit Kotsupho; Ananda Wickremeratne; David Kalpana

“The Science of Spirituality Across the Curriculum”: Suwanda Sugunasiri (past president of the Buddhist Council of Canada)

“Women’s Liberation in Won Buddhism”: Chung Ok Lee (Won Buddhist Meditation Center, New York)

“A New Dharma for the West—The Westernization of Buddhism (Panel)”: Walpola Piyananda; Suhita Dharma; Peter Timmerman; Sujata Linda Klevnick; Norman Fisher; Koshin Ogui; Hye Shim Sunim; Samu Sunim

“Buddhist & Taoist Exercise for Longevity and Health—Meditation and *Qigong* Healing”: Yu Cheng Huang (Dr. of Traditional Chinese Medicine)

“World Scriptures: Learning from Other Traditions—Part II ”: Sulayman Nyang (Howard University); Kananke Dhammadinna (International Cultural and Peace Promotional Foundation, Sri Lanka); Cliff Edwards (Virginia Commonwealth University); Whalen Lai (University of California, Davis)

“What Do Christians and Buddhists Have to Say to Each Other? ”: Donald Mitchell (Purdue University)

“Buddhist Women as Engaged Buddhists: Peace, Non-violence and the Environment”: Amy Krantz (the New York chapter of the Buddhist Peace Fellowship); Sonam Lhamo Singeri (Tibetan Women’s Association); Bhikkhuni Miao Kwang Sudharma; Hema Goonatilake

“Old Fashioned Buddhism for Today”: Ven. Panyananda (prominent senior monk in the Thai Sangha Order); Ven. Santikaro Bhikkhu, interpreter

The Academy と題するプログラムが8月31日から9月3日までの間生まれ、20のセッションのなかに見られた仏教に関する発表は次のものである。

“Buddhism and Pluralism: A Tension? ”: Mahinda Deegalle (Buddhist monk from Sri Lanka)

“Anagarika Dharmapala, The Man and His Vision of Buddhism in a Religiously Plural World”: Ananda Wickremeratne (Visiting Professor, Loyola University)

“Buddhism and Philosophy of Religion: Buddhism as a Way of Life”: Frank Hoffman (Ph. D, University of London)

“The Future of Buddhist Economics”: Glen Alexandrin (Villanova University, PA)

“Identity, Conflict and Globality” というテーマを付し、多元主義を問題としたセッションのなかでは次のワークショップとパネルが仏教と関係する。

“Workshop: “Buddhism in Chicago”: Rev. Sunnan Kubose (Buddhist Temple of Chicago)

“Our Religions’ in a Religiously Plural World (Panel)”: Harvey Cox (Christian theologian); Seyyed Hossein Nasr (George Washington University); Tu Wei-ming (Harvard University); Masao Abe (Professor Emeritus, Nara University); Jeffrey Carlson (DePaul University, Chicago)

「暴力」をとりあげた各種シンポジウムが17ほど設けられていた。そのなかでスリランカの平和闘争を問題としたものがある。

“Religion and the Struggle for Peace in Sri Lanka”: A. T. Ariyaratne; Won Yong Kang (Christian Academy in Seoul, Korea); Anand Mohan (Queens College, New York)

「職業」を問題としたシンポジウムは12あったが、仏教を中心に扱うものは見あたらなかった。そのほか「情報メディアの新しいパラダイム」と題して二つのパネルが組まれていた。パフォーマンス・シリーズとして各国の伝統舞踊、音楽、朗読、日本の狂言等の発表が会場各所でなされていた。ビデオ・映画祭も大会中数日間にぎわっていたようである。

#### いくつかのセッションについての所感

発表タイトル紹介に紙数を取られてしまったが、私が聞いた興味あるもののうちの2, 3を具体的に見てみたい。

ひとつはハンス・キュング (Hans Küng) 博士の主

張を直接耳にしたことであろうか。キュング博士の背景を簡単に紹介してみたい。博士はチュービンゲン大学(ドイツ)にあって世界的宗教交流運動をカトリックの立場で積極的に推進されてこられた方である。1979年氏はヴァチカン・ローマカトリック本部によって聖職受任命(mandate)を停止された。カトリック教会の歴史ははたして無謬性に満ちているのか? その信仰や道義において本当に教会は守られているのか? キリスト教にとって真理とは何か? 今日我々は本当にその導きに自らを託せるのか? このような問いに答えたものが、教授の著書 *The Church—Maintained in Truth* (Vintage Books, tr., New York, 1982) である。ヴァチカンの検閲のあとで記されたその本の「後書き」(p. 78)において博士は次のように述べている。「ごく初期の頃、ローマ(本部)や教皇をよく知るようになったのだが、(あらゆる誹謗・中傷にもかかわらず)私はまったく反ローマ的感情を抱いていないのだ。私は歴代の教皇や現在の法王に反対しているのではなく、聖書の根拠に則った、使徒ペテロの伝道(しかしながら絶対主義的神学の特徴を取り除いた)にむけた教会を内外に強く主張してきただけなのである。私は、精神的責任、内面的指導性、そして全体としての教会の至福への積極的関心という意味における真正なる聖職者の第一義を継続的に語ってきた。そうなればそれはすべてのエキュメニカルな世界における瞑想と調和にとって普遍的に尊い権威となるかもしれないのである。」

ここでペテロ的伝道とは何か。ペテロが暗喩しているものはイエスの弟子としての「堅固な」信仰である。petri- という語根が「石」を意味している所以である。「マルコ伝(8章33節)」のなかでシモン・ペテロはイエスに次のように言われる。「イエス振返りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言ひ給ふ『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思はず、反って人のことを思う』」生けるキリストとしてのイエスへの信仰が原理主義的になったとき、彼はイエス自身によって呵責されたのである。さらにルカ伝22章33-34節がよく引用される。「シモン言ふ『主よ、我は汝とともに獄にまでも、死にまでも往かんと覚悟せり』イエス言ひ給ふ『ペテロよ我なんじに告ぐ、今日なんじ三度われを知らずと否むまでは鶏鳴かざるべし』」。キリストの教会とは無謬なるものではなく、逆に聖霊によってあやまちの度に糺され、さらに完全な真理へとむかうプロセスであるということがここで示されているのであろう。

以上のような主張をもって博士は「世界教会」としての今回の大会に臨まれたのであろう。大会では“Reflections on the 1993 Parliament of the World’s Religions” というテーマのもと大勢の聴衆の前でこのたびの大会の

意義を語られた。博士が訴えかけられたことは、この会議は将来に希望を与えるものであり、国家主義や外国人に対する偏見(xenophobia)を打ち破り、よりよく相互を了解してゆくための象徴的意義を有しているということであった。旧ユーゴの現状に言及しておられたが、いかに人種的・文化的制約を越えて理解し合うことが困難なことであるか、身にしみる。宗教と国家主義が不可分の関係に及ぶとき、それは悲劇的な結末を予想させる。「宣教(kerygma)」の本質的意味が論議されて久しいが、私は「内」を透徹することは「外」にむかって自己を解放することである、という実感をもってそのスピーチを聴き終えた。

さてもうひとつ印象深いセッションはR. H. シーガー教授(Dr. Richard Hughes Seager)による個人発表、「The 1893 World's Parliament of Religions: Context; Agenda; and Significance」である。1893年の「シカゴ万国宗教会議」研究の筆頭に挙げられる人で現在ハーバード大学で宗教学を講じておられる。私の今回の参加目的のひとつは、1893年の大会で清沢満之の英訳『宗教哲学骸骨』への評価がいかなるものであったかを知ることであったので、この発表タイトルを眼にしたときはうれしかった。発表はその大会の意義と、何故それが開かれるに至ったかの当時の世界の宗教的環境等を具体的に述べるものであった。この1993年大会に組み込まれるかたちで氏の“The Dawn of Religious Pluralism(宗教的多元主義の黎明)”と題した本がシカゴ・オープンコート社から出版されている。

1893年の大会は17日間の会期、190人の発表者、発表されたペーパー数200という大きなものであった。仏教、儒教、道教、キリスト教、ユダヤ教、神道、ヒンズー教、ジャイナ教、イスラム教、ゾロアスター教という世界の代表的宗教が出席した。当時は概して科学、宗教間相互の境目が明快であり、飛ぶ鳥も落とす勢いの科学に対抗、あるいは折衷するような形で、宗教は自己の立場を主唱していた。宗教間の対話の重要性や平和への希望など、今日の課題に通ずるテーマも多いが、時代の雰囲気は科学万能主義的、進化主義的な、いわば楽天的なものを有していたのは否めない。もちろん、西洋中心主義の枠組みにおいてであるが、東洋の宗教が西洋にたいして「対話」という西洋的土台を使いながら自らの立場を主張し始めた最初の年と、1893年を意義づけることができるだろう。そのなかにスリランカのダルマパーラ(南方系上座部仏教)、インドのヴィヴェーカーナンダ(ヒンズー教)、日本の釈宗演(禅仏教)たちがいたのである。

#### 大会をふりかえって

今回の8日間の大会は期間としては前回より短い、口頭発表数自体は前回は大幅に上回っている。あまりにも複雑に錯綜した現代の諸問題のために、今回の大会はその論議すべきテーマも多岐にわたった。正面から宗教の本質に取り組むもの(Spiritualityについて等)からAIDSの問題、人種差別、宗教間の戦争、ゲイ・レズビアン伝道師の問題など、きわめて現代を象徴するテーマであった。ひいては人類の未来にとってUFOによる人間の誘拐事件がどういう意味をもつか、などというテーマに至るまでであった。それはいかに多様な関心を含む大会であったかを物語っている。

全般的に言って、この大会の基調を構成したのは「地球倫理(Global Ethic)」という概念であった。「地球倫理」文書が採択されたが、第一にその中心的内容は「平和への取り組み」ということである。インド亡命中のダライ・ラマ14世の、「平和にむけて我々個々が自らの伝統に立ってその精神的責任を全うしなければならない」という、閉会式における力強い訴えはグラントパークを埋め尽くした多数の聴衆の感動をもたらした。地球倫理宣言には侵略、狂信、憎悪そして外国人排斥などにたいして宗教が積極的役割を果たしてゆくべきことが強調されている。

もうひとつの課題は「環境(エコロジー)」である。それは人間環境の「聖浄化」でもあり、地球環境の浄化でもある。人類の生存そのものが危うくなっているのである。倫理という問題は最近新たな見地からいろいろな学会で問題となっているが、この大会でも中心的なテーマであった。過去100年間で世界大戦がふたつも勃発しているが、まさにこれからの100年を展望するとき、過去の反省を踏まえ、相互理解をとおして、地球的ネットワークを創造してゆくか、あるいは相互誤解と相互破壊の道を歩むかふたつにひとつであり、それは世界の指導的宗教の肩にかかっているともしえるであろう。2093年に人類はいかなるParliament of World's Religionsを開くのであろうか。

付記：米國中東部唯一の東本願寺関係寺院であるBuddhist Temple of Chicagoを9月29日に3人で訪問いたしました。久保瀬暁明師、久保瀬Sunnan師、ならびに足利祐敬師はアメリカにおいて仏教伝道の最前線で活躍しておられますが、今回ご多忙中にもかかわらず時間を割いていただき、私達はアメリカ仏教の現状について詳しく伺うことができました。

## 1993年度後期 大谷大学開放セミナー

1993年度後期開講の「大谷大学開放セミナー」は、10月6日から12月18日にわたり、多目的ホールを会場にして開催された。今回は、仏教学の古田和弘教授による「人間性の探究—『涅槃経』に学ぶ—」と、児童文学の西田良子教授による「宮沢賢治の世界—こころの軌跡をたどりながら—」の二つの公開講座が開かれた。二つの講座の概要、各回のテーマと日程は、下記のようにであった。

### 人間性の探究—『涅槃経』に学ぶ—

講師 大谷大学教授 古田和弘 (仏教学)  
 期間 10月6日(水)~11月10日(水) <5回>  
 時間 水曜日 午後6時30分~8時30分  
 会場 大谷大学多目的ホール  
 参加費 5,000円

**概要**  
 『涅槃経』(ねはんぎょう)は、特定の宗派のよりのところとなった経典ではない。けれども、主要な大乘経典として古くから中国・日本の仏教界において重要視されてきた。

「涅槃」(ねはん)は仏教の究極目標となる境地をあらわす言葉であるが、この経典は、その「涅槃」の意味をもっとも深く、また徹底して説き明かそうとしている。まず釈尊の臨終の時にちなんで、「仏とは何であるか」を深く追及する。仏の本質についての探究の眼は、次に一転して、人間の本性の探究へと向けられる。仏の本質を明らかにし、人間の本性を究明する、その根拠となるのが、この経典に説く「大般涅槃」(だいはつねはん)なのである。

このような教説の趣旨をできるだけわかりやすく学べるよう、次のような順序で経文に触れることにしたい。

- (1) 『涅槃経』という経典全体の構成や概要を整理し、その主題である「涅槃」の意味について学ぶ。
- (2) 釈尊の臨終を契機として、仏の寿命がどのように問題にされ、仏の本質がどのように説かれているかを学ぶ。この場合、それについての『法華経』の教説にも注意したい。
- (3) 仏の本質の探究が人間の本性の究明へと転ずる趣旨、そしてそこに説かれる人間性の意味を学ぶ。
- (4) 人間性の解明の素材として用いられている王舎城の悲劇、阿闍世王の物語について学ぶ。これには『観無量寿経』(かんむりょうじゅきょう)の教説にも注意を向けたい。
- (5) 人間性の自覚を意味する成仏あるいは救済の例外として説かれる、一闍提(いちせんたい)といわれる人々の在り方、そして一闍提についての最終的な教説を学ぶ。

- |     |           |                 |
|-----|-----------|-----------------|
| 第1回 | 10月6日(水)  | 「大般涅槃」(だいはつねはん) |
| 第2回 | 10月13日(水) | 如来の寿命           |
| 第3回 | 10月20日(水) | 人間の本性           |
| 第4回 | 10月27日(水) | 阿闍世王(あじゃせおう)    |
| 第5回 | 11月10日(水) | 一闍提(いちせんたい)     |

### 宮沢賢治の世界—こころの軌跡をたどりながら—

講師 大谷大学教授 西田良子 (児童文学)  
 期間 11月13日(土)~12月18日(土) <5回>  
 時間 土曜日 午後2時00分~4時00分  
 会場 大谷大学多目的ホール  
 参加費 5,000円

**概要**

宮沢賢治の作品には不思議な魅力がある。自分の詩を〈心象スケッチ〉と呼び、岩手の自然から生まれた童話を〈イーハトヴ童話〉と名づけた賢治は、しばしばユニークな造語を用いているため、とかく難解に思われがちであるが、いろいろな作品を読み進んでいくと、最初は不可解だった謎めいた言葉が、次第に〈未知の世界を開くキーワード〉となって、新たな意識を喚起し、新たな眼を開かせてくれる。

「あらゆる人のまことの幸福」を悲願とした賢治には、「いのち」「死」「幸福」「社会」をテーマにした作品が多いが、作品の基底にある思想や意識は、制作年代によってかなり異なっている。例えば25歳頃の作といわれる「よだかの星」では、この世の苦しみから遁れるために星の世界をめざした〈よだか〉は、ひとりさびしく、つらいおもいに耐えながら自分で星に生まれ変わった。しかし、晩年の作品である「銀河鉄道の夜」の中の〈さそり〉は、「どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。」と祈って星になる。〈よだかの転生〉と〈さそりの転生〉には「自力」と「祈り」の違いがあり、賢治の意識の変化が感じられる。その他、生命観、宗教観、社会意識などにも年代的な変化がみられるが、特に「妹トシの死」「羅須地人協会の挫折」「長い闘病生活」は、彼の意識に大きな変化をもたらしている。

ところが、そうした変化の中でも生涯変わらなかったのは、賢治の〈まことを求めつづける〉真摯な姿勢であった。

本セミナーでは、賢治の童話や詩、書簡や手帳などを資料として、賢治のこころの軌跡をたどりながら、賢治の世界をじっくりと味わってみたいと思う。

- |     |           |  |
|-----|-----------|--|
| 第1回 | 11月13日(土) | まことを求めつづけた人・宮沢賢治                         |
| 第2回 | 11月27日(土) | 「心象のスケッチ」と「イーハトヴ童話」                      |
| 第3回 | 12月4日(土)  | 賢治の生命観・宗教観                               |
| 第4回 | 12月11日(土) | 賢治の時間意識と第四次元の芸術                          |
| 第5回 | 12月18日(土) | 「雨ニモマケズ」のこころ<br>テキスト『宮沢賢治を読む』(創元社・西田良子編) |



日時 1993年11月19日(金)14:00-16:00

場所 1号館 1313教室

大谷大学開放セミナー特別公開講座

かみすき

## ブータンの紙漉

—経本が出来るまで—

フランス国立科学研究庁教授 今枝 由郎

大谷大学には、世界有数のチベットの文献がある。それはすべて紙に書かれている。文献を読む研究は進んでいるが、それが書かれている紙についてはほとんど研究されていない。

今世紀初頭に発見された敦煌文書は、なかには竹や木簡に書かれているものがあるが、大半は紙に書かれている。その当時大量の紙が敦煌に入ってきたことをしめている。パリに、『シルクロード文明誌図鑑』（原書房1989）を書いたドレージュ（J. P. Drège）という研究者がいる。彼が初めて紙の研究をはじめた。そこで彼がいただいた疑問は、彼らがどのようにして紙を漉いていたのか、ということであった。というのは、敦煌文書の場合、時代を決定するのが難しく、紙の研究が時代決定の大きな手がかりになるのではないかと考えられたからである。

このような背景もあって、私は、1981年から1990年まで国立図書館顧問としてブータンに滞在する間に、紙漉に関する資料を調べてきた。

ブータンは、ヒマラヤ山脈の東端南麓に位置する、人口六十万人ほどの小さな王国である。チベット文化圏の中にあり、独立国であり、仏教を国教とする唯一の国である。ブータンを代表とするチベット仏教圏での紙の一番の用途は、仏教経典である。チベット語大蔵経をはじめとする膨大な仏教経典はすべて伝統的な手漉き紙に写され、木版印刷されてきた。そしていまなおこの伝統が生き続けている。

ブータンには二種類の紙がある。それは材料の違いによるのではなく、漉き方の違いによっている。一つは、日本にもなじみがある和紙と同系の漉き方である。もう一つは、日本にはまったく伝わらなかったものであるが、チベットを中心にインドあるいは東南アジアには一般に広がっているものである。

ブータンの紙の材料は、沈丁花<sup>しんちやうげ</sup>である。高度二千四、五百メートルの山に沈丁花が自生している森がある。その香りは強く、その内皮は毒性を帯びている。したがってそれから作られた紙は虫が食わない。ただし

在物があるとそれを食う。

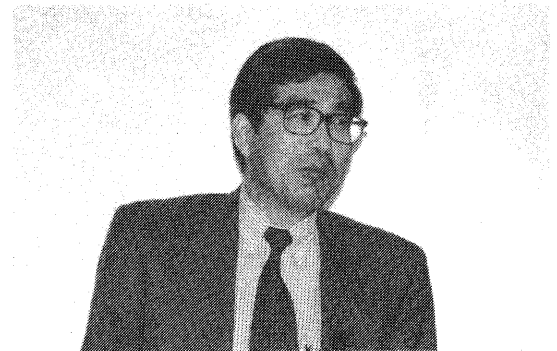
紙の材料に三椏<sup>みつまた</sup>によく似たものを混ぜて使うこともある。上等な紙は沈丁花の内皮100パーセントで漉く。その場合虫食いはまず起こらない。実際に五、六百年たった文書もあるが、ほんとうにこしのある、はりのあるきれいな紙が残っている。

経本に虫食いがあるのは、墨の問題なのである。墨は松脂<sup>まつやに</sup>の煤<sup>すす</sup>から作る。それに膠<sup>にかわ</sup>のような糊をまぜて使う。それは動物の皮を煮て作られる。虫はこの墨を食うのである。したがって、経本の字の部分のみが虫食いにあうことになる。

ブータンの二種類の紙の、一つは“ツァ・ショ”と呼ばれ、もう一つは“レ・ショ”と呼ばれている。

“ツァ・ショ”と呼ばれる紙は、まず、木枠の上に、割竹を細い糸で編んだ簀<sup>すい</sup>をひいて、パルプを溶かし込んだ水槽のなかにひたし、そのパルプの溶液を下から漉き上げる。こうしてできた紙を“ツァ・ショ”（tsha shog 竹の簀で漉いた紙）と呼ぶ。そしてこの紙の特徴は、その簀の糸の目と、竹ひごの目が紙に透しとなって見えることである。これが日本の和紙と同系の漉き方である。

これと異なる“レ・ショ”と呼ばれる紙は、木枠に木



綿の布をはって、そこに上からパルプを流し込んで漉いたものである。この漉き方にもとづいてこの紙を“レ・ショ”（ras shog 布で漉いた紙）と呼んでいる。この漉き方は、日本にはなく、チベット系の漉き方ということができる。

日本に伝わった和紙の漉き方は、中国から伝来したものであるが、それはアラブ圏を通して、ヨーロッパにも伝わっている。

チベットに紙の漉き方が伝わったのは、七世紀の前半であり、和紙と同系の漉き方が中国から伝わったと考えられる。

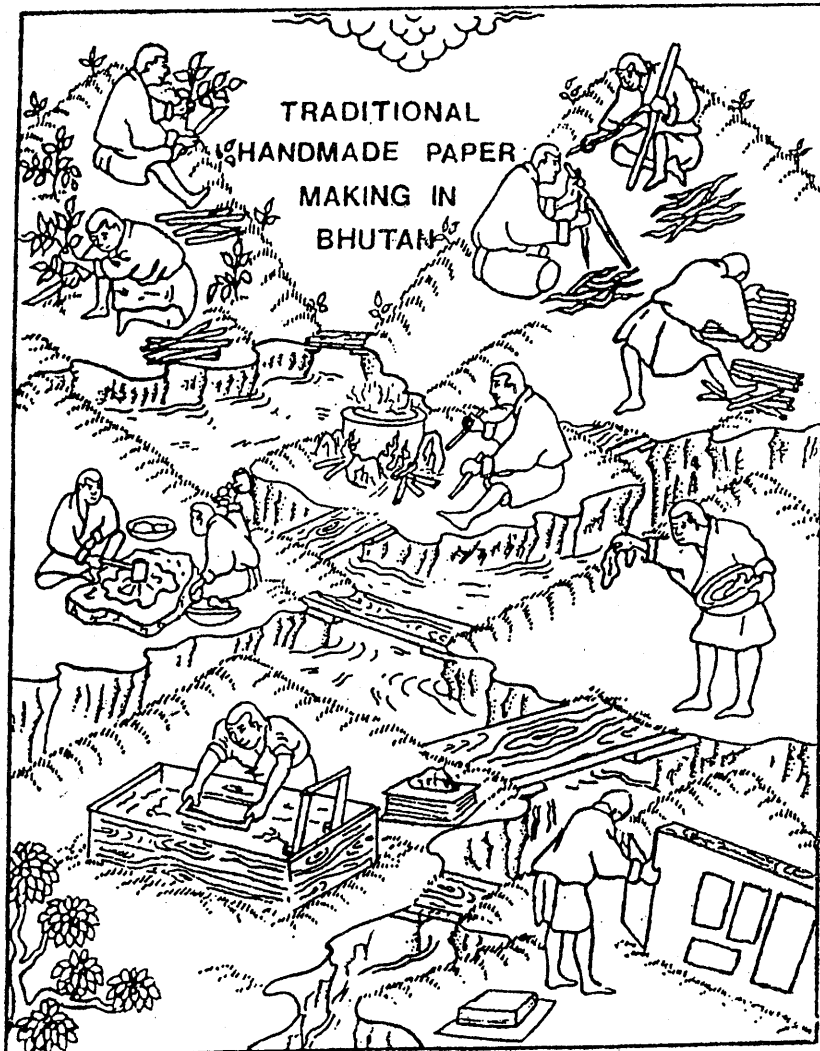
紀元1000年以前のものと思われる敦煌文書の紙を研究したドレージュ氏によると、敦煌文書の中のチベット文でも中国文でも、すかし目と縦の糸のあみ目が出てくるものが大半である。このことより、紀元前1000年以前は、チベットの普通の紙漉の方法は、和紙と同系のもの

であったことがわかる。ところが12世紀以後現在にいたるまでのチベットは、布で漉く型のみである。そして、ネパールも含めて、東南アジアのほとんどが、この布で漉く方法を取っている。

世界の紙漉の型を調べたダード・ハンター (Dard Hunter) の“*Papermaking*” (New York 1943) にも同じ報告がなされている。

不思議なことに、ブータンのみには二つの型が混在しているのである。布で漉く型が広がっている圏域のなかで、ブータンは孤立して和紙と同系の型をもっていることになる。

以上は、当日の講演を要約して編集したものである。材料の沈丁花を取ってくるころから始まり、その内皮を裂き、煮沸し、碎き、紙を漉く行程、さらに紙に木版印刷し、経本が刷り上がるまでの全行程が、70枚のカラースライドを使って紹介された。そしてこの講演のためにブータンで印刷された紙見本が、会場の希望者に配布された。



# 真宗総合研究所彙報 1993.10-1994.3

## ■研究所委員会

12月7日(火) 12時10分 博綜館第3会議室  
議題 「一般研究」研究員選考の件について

## ■「指定研究」会議/研究会

### 大学史編纂研究

11月10日(火) 16時10分 第一研究分室1  
議題 各研究員の分担の確認  
2月11日(金) 13時30分 第4小会議室  
議題 今後の研究計画について  
3月14日(月) 20時30分 第一研究分室1  
研究会  
3月22日(火) 16時30分 第一研究分室1  
研究会

### 国際仏教研究

10月6日(水) 12時10分 第1小会議室  
議題 ICANAS 参加報告  
10月18日(月) 16時 第4会議室  
テーマ インドにおける瞑想について  
講師 Jain Vishva Bharati  
Director,  
Dr. Nathmal Tatia  
10月22日(金) 16時10分 第4会議室  
テーマ 中国的宗教現状と宗教政策  
講師 中央民族学院  
胡 振華 教授  
通訳 劉 建 氏  
11月10日(水) 12時10分 第1小会議室  
議題 世界宗教会議参加報告  
12月1日(水) 12時10分 第1小会議室  
議題 研究班成果報告について  
12月9日(木) 16時 第4会議室  
テーマ スリランカにおける仏教研究の現状について  
講師 Director of Research, Buddhist and Pali  
University of Sri Lanka  
真宗総合研究所客員研究員  
Professor Oliver Abeynayake  
12月10日(金) 15時 第4会議室  
テーマ 芭蕉の宗教世界  
講師 Guilford College  
North Carolina Japan Center  
真宗総合研究所客員研究員  
Professor David Landis Barnhill

1月12日(水) 12時10分 第1小会議室  
議題 研究班成果報告について  
3月14日(月) 10時30分 第1小会議室  
議題 研究班成果報告について

### 真宗史料研究

11月8日(月) 真宗総合研究所会議室  
研究会：園林文庫文書——明治六年の建白書をめぐって——  
報告者：熊野恒陽(研究補助員)  
上杉義麿(研究補助員)  
助言者：木場明志(研究員・助教授)  
12月21日(火) A V棟研究所分室  
研究会：本願寺家臣名簿をめぐって  
報告者：大桑 齊(研究員・教授)  
谷端昭夫(嘱託研究員)  
上杉義麿(研究補助員)  
3月10日(木) A V棟研究所分室  
研究会：近代親鸞関係著述年表・恵空の著述について  
報告者：福島和人(嘱託研究員)  
西田真因(嘱託研究員)

### 大蔵経学術用語研究

以下の日時に研究会を開いた。

10月4日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
10月18日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
11月1日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
11月15日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
11月29日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
12月13日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
12月20日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
1月10日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
1月24日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
2月14日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
2月28日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
3月7日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室  
3月14日(月) 18時 大蔵経学術用語研究室

## ■1993年度後期「開放セミナー」開催

†水曜講座  
「人間性の探究—『涅槃経』に学ぶ—」  
講師 古田 和弘 教授  
期間 10月6日、13日、20日、27日、11月10日の五  
回 午後6時半から8時半まで

†土曜講座

「宮沢賢治の世界—こころの軌跡をたどりながら—」

講師 西田 良子 教授

期間 11月13日、27日、12月4日、11日、18日の五  
回 午後2時から4時まで

■大谷大学開放セミナー特別公開講座

「ブータンの紙漉—経本が出来るまで—」

講師 フランス国立科学研究庁  
今枝 由郎 教授

期日 1993年11月19日(金)14時から16時

会場 1313教室

■学会参加/調査派遣

†The Sixth Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies

8月3日から5日まで、大谷大学において、国際真宗学会 (IASBS) 第6回大会が開催され、国際仏教研究班の研究員が積極的に参加した。

†1993 AAR/SBL Annual Meeting

11月20日から23日まで、Washington, D.C. で、1993年度アメリカ宗教学会年次大会が開催され、国際仏教研究班のロバート・F・ローズ研究員が参加した。

†イギリスにおける仏教研究の調査

国際仏教研究班の多田稔研究員は、イギリスにおける仏教研究の調査と資料収集のため、1994年3月16日から30日まで、イギリスのロンドン大学、ランカスター大学、オックスフォード大学等を訪問し、現状の調査と研究者間の交流を深めてきた。

■客員研究員

John Ross Carter

Professor, Colgate University

Director of Chapel House

Project Title: Key Issues in Shin Buddhist Thought in a Comparative Context

Duration: 1/4-31/8, 1993

Imaeda Yoshiro

Directeur de recherche

Centre National de la Recherche Scientifique (CNRS)

Project Title: History and Philosophy of Tibetan World

Duration: 1/4/1933-31/3/1994

David Landis Barnhill

Associate Professor, Guilford College

North Carolina Japan Center

Project Title: The Journey Itself Home: A Study of the Religiosity of Matsuo Basho

Duration: 1/9-15/12, 1993

Oliver Abeynayake

Director of Research

Buddhist and Pali University of Sri Lanka

Project Title: Training in Thesaurus Construction

Duration: 22/11-28/12, 1993

■WorldScript Tibetan for Macintosh

「指定研究」の「西藏文献研究」では、フランス国立科学研究庁の今枝由郎教授 (客員研究員/嘱託研究員) とアップル社の元プログラマーであったスティーヴ・ハートウエル氏を迎えて、コンピューターによるチベット語システムの開発に取り組み、このほどほぼ完成に近づき、評価版を限定配布することになった。今後のチベット語文献のコンピューター処理に大いに役立つことであろう。

■お詫びと訂正

『研究所報』No. 30 (1993.9.30) に多くの誤字がありましたことをここにお詫びし、訂正いたします。

p. 1, 右欄本文 l.28: 研究所から→研究所が

p. 11, l.9; l.11: 西田幾太郎→西田幾多郎

p. 12, l.24: Phenomenologie→Phänomenologie

p. 19, l.3: Politicial→Political

p. 19, l.4: Neibhur→Niebuhr

p. 21, 右欄本文 l.2: 伝導→伝道

p. 21, 右欄本文 l.18: 常磐→常盤

p. 23, 左欄 l.31: Shinishu→Shinshu

研 究 所 報 第 31 号

1994年3月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒 602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501